支え合いマップ

聴取の技法

<２０１８年/１０月版>

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞
〒350-0451　埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1
電話 049-294-8284
ホームページ http://juminryu.web.fc2.com/

本冊子の趣旨と活用法

本冊子は、住民と一緒に支え合いマップづくりをする福祉関係者のためのマニュアルである。主として支え合いマップ・インストラクター・セミナーの際の講義資料として使用している。

今回の改定の主旨は、テーマを聴取の技術一本に絞ったことである。本書の改定と同時進行で、「マップづくり入門」の全面改訂を行ったが、この際と中身を本格的に充実させたため、こちらの方は「聴取の技術」に絞ることにしたものだ。

⌘

マップ作りの技術は日々、進化している。その時点で最新の情報やノウハウを得るためには、表紙の〈〇〇年〇月版〉の最新版を求めていただきたい

◇目次◇

＜第１章＞　**聴取とは？**/３

＜第２章＞　**聴取の基本的な心構え**/８

＜第３章＞　**住民の関わり合いさがし**/１６

＜第４章＞　**問題さがし**/２３

＜第５章＞　**解決策さがし**/５２

＜第１章＞

聴取とは？

1.聴取とは生の人間との対決だ

■「人に援助をされる者は、もっとしおらしくせよ」？

マップ作りで住民に集まってもらい、いろいろご近所の事情を聴き出すのであるが、それは想像されるほど「穏やか」なものではない。そこに来ているのは「住民」であるが、住民が普段、福祉をどう考えていると思われるか。

ちょっと気になる人が見つかったとする。例えばそれが「引きこもりの男性」の場合、その人にどう関わればいいのかを問うと、まず飛び出すのがこんな言葉である。「あの人は、ヘンにプライドが高い」。プライドが高いのが、なぜいけないのか。人間はだれでも一定のプライドを持っているものである。それが要援護者になると、許されない。「ヘンに」という表現に、そういう気持ちが込められている。はっきり言えば、住民の関わりの対象になっているにしては「頭が高い」という意味である。もっとしおらしくすべきだということだろう。

■「だいたいあの人は性格が悪い」

３０代の精神障害の女性がマップで見つかった。母も同様の障害を抱えている。女性は、ご近所にある一本道を毎日のように散歩している。声をかけても返事をしない。そこでこんな言葉が飛び出した。「だいたいあの人は性格が悪い」。

普通、このような場で、誰かのことを「性格が悪い」と表現することは、まずないだろう。誰が考えても失礼だからだ。しかしこういう言葉が、「福祉の対象者」には容赦なく使われる。

そこで、障害を持つということはどういうことなのかを、時間をかけて説明した後で、今度出会ったら「こんにちは」程度でもいいから声をかけてあげて下さいよ

と言ったら、「あの人は返事もしない」。それでもいいじゃないですかと食い下がった。

そのとき救われたのは、私の脇に座っていた一人暮らし女性が私にこうささやいたことだ。「今日は一つ、宿題をいただきました。彼女と出会ったら、こんにちはと声をかけることにします」。

■「そこまでやらねばならないの？」

ある引きこもりの父子について、どうやって関わったらいいかと切り出したら、皆さん、「あの二人は、どうしようもないよ」と、初めから匙を投げていた。

そんなに難しい相手なのかと、私はいろいろな角度から質問をぶつけてみたら、そうでもないことがわかってきた。父は車いすで毎日、自分の畑まで出かける。彼と畑が隣り合わせだという女性がマップ作りの場にいた。「挨拶ぐらい、かわすのでは？」と水を向けると、「向こうから声をかけてくる。収穫した野菜で作ったおしんこもくれる」という。なんだ、普通の人ではないか。

息子がパニック症候群らしく、コンビニで働いていたが、最近、解雇されたという。父親は心配しているのではと女性に聞いたら、「このままでは死ぬに死にきれない」とつぶやいていたらしい。それならみんなで息子の心配をしてあげればいいではないかと私は言った。すると１人の男性が、「ああいう病気を持ったあの子をコンビニで働かせること自体に無理がある」ともっともなことを言った。「そういえば、俺の家の近くにゴミステーションがあるけど、そこで俺には挨拶をするよ」。

先ほどの女性はまた、父親は畑で歌を聞かせてくれるとも言った。これを受けて、別の男性が、「そういえば、昔はカラオケにも来ていた」。そのカラオケは、今でもみんなでやっているらしい。「それなら、もう一度強引に引っ張り出してみたら？」とけしかけた。いろいろ聴き出しているうちに、父親は地域の「頼母子講」にも参加していたことも分かった。

父子と住民との接点がいろいろ見つかり、そこから接触できる可能性が見えてきたなと参加者も思い始めた時、女性が私にこう尋ねた。「私たち、そこまでやらねばならないの？」。そうだ、と私が言ったら、黙っていた。父子に関わるのが嫌だというのではなく、自分たちがそこまでやらねばならないとは思ってもみなかった、

というのだ。

父の状況や気持を汲んで、どうかこの息子さんを皆さんの子どもだと思って、面倒を見てあげて下さいよと私は懇願するように言った。すると、リーダーらしい男性がこれを受けて、「じゃあ、やるか！」

ここまで来るのに、３０分はかかっている。マップ作りには、こういう「福祉教育」の時間も必要になる。普通の住民は、地域の気になる人について心配し、その人に何をしてあげたらいいのかなどと考えるチャンスがあまりないのだ。支え合いマップ作りの場には、それなりの心構えで来てくれると思うと、期待外れになる。普段の生活そのままの、生の人間との対峙になること―「３０分」の予定外の時間が加わることも、覚悟しておく必要がある。

2.聴取は総合力の勝負

聴取とは、住宅地図を広げて、住民から様々なことを聴き出し、それを地図上に記入していくことである。この聴取という作業には、福祉に関わる総合的な知識と能力が求められる。

マップ作りで、自分の福祉に関する総合力が試されるのだ。だから聴取に成功するには、また進歩するには、一つや二つの側面ではなく、さまざまな面からの進歩が求められる。以下にいくつか並べてみよう。

❶福祉に関する一般的な、幅広い知識

今の福祉の動向。公私の機関の事業・サービスに関する知識。住民やボランティア等の活動の実態。話題になっている問題。これからの動き。

❷マップを作る地域の福祉を含めた各種状況に関する知識

できればマップを作るご近所周辺に関する知識も。

❸福祉のあり方に対する自分なりの考え方

一般的知識と共に、自分なりの考え方を持つ。それも福祉の幅広い分野の持論を。

❹住民とのコミュニケーション能力

様々な住民と臆せず、腹蔵なく話し合いができる資質。考えの違う住民とも率直な議論ができる資質。相手の関心をこちらの方へ向けさせる力。

❺住民を説得、教育する能力

偏見など間違った考えを持つ住民、福祉に理解のない住民を説得、教育する力。

❻住民を掌握する能力

あちこちで井戸端会議を始める住民を統率し、こちらの手順・方針に従わせる力。

❼住民から問題を引き出し、解決策も考えさせる力。

自分たちが抱える問題を考えたがらない住民を説得して、問題や解決策を抽出させる力。

❽住民から得たヒントを基に、課題と解決策を抽出する構想力。

その課題と解決策を住民に納得させる力も。しかも一時間半という時間内に。

❾出てきた課題に積極的に取り組もうと思わせる力。

マップ作りで終わりではなく、その課題に取り組もうという姿勢にさせる力。

3.めざすは強力なご近所福祉づくり

■マップ作りが目的化してしまった

　では、何のために取り組み課題を抽出するのか。ここが今、一番の課題だ。

　ただ一定の範囲を切り取って、その中の人々のふれあいや関わり合いを探して線を引く。要援護者を特定し、関わりの状況を調べる。それでマップ作りは終わり、と思っている人が多い。マップ作りが目的化してしまった。マップを何のために作るのかが、ぼやけてしまった。

■ご近所福祉を進めるための課題を抽出すること

マップ作りとは、ご近所福祉を進めるための課題を抽出することである。目的はご近所福祉づくりなのだ。

地域は四つの層からできている。その中の第一層、第二層、第三層への関心は高いが、そのあとに第四層があることが、今の関係者には意識化されていない。

第四層が重要なのは、ここに当事者がいるからである。彼らはここから出られない。自立生活をするために、ここ（ご近所）の福祉を充実させてほしいと言っている。しかもここには世話焼きさんなどの人材が豊富である。ならばその人材をうまく生かして、ご近所福祉を充実させていけばいい。これが当事者を第一に据えた地域福祉のあり方ではないか。

そのためにはまず、ご近所でどこまで助け合いが行われているかを探らねばならない。しかし住民の助け合いは見えない。見えないように活動しているからだ。そこで支え合いマップの出番になる。マップを作れば、助け合いが見える化する。その結果をフルに生かして、効率的にご近所福祉を作っていけばいい。

というわけで、マップ作りとご近所福祉づくりは密接に結びついている。しかも最近は、介護保険制度が行き詰って、住民の助け合いに対する期待が高まっている。今のような自然発生的な助け合いだけでは心もとない。もっと強力なご近所福祉を作っていかねばならない。どうやったら強力なご近所福祉を作ることができるのか、これが喫緊の課題になっているのだ。

＜第２章＞

聴取の基本的な心構え

1.聴取に５つの悪条件

マップ作りの聴取には、様々な悪条件が待ち構えている。いずれもかなり厳しい条件で、その一つ一つを克服していく努力をしなければマップ作りはうまくいかない。

①聴取の時間はわずかに１時間半

–これ以上長いと疲れる。だから一刻も早く相手の懐に飛び込まないと…

②住民と聴取者は初対面

–親しくなるには時間が短すぎる。でも仕方がない

③引き出したいのは、住民がしゃべりたがらない情報

–ある程度強引にでも聞き出す努力をする必要がある

④住民は必ずしも真剣に地域のことを考えてはいない

–こちらが真剣になっていることをまず理解してもらわねば

⑤日本人の“助け合い拒否型”おつき合いの伝統

－自分のことは知られたくない、相手のことは知ってはならない

聴取は極めて難しいということである。ただ淡々と質問をしていけば、素直に答えてもらえるなどというものではないし、相手はそれほど真剣にこちらの質問には

答えてくれない。マップ作りは真剣勝負。聴取する側とされる側の「闘い」でもある。

2.悪条件を乗り越える５つの努力

このような悪条件のもとでも、何とか聞きたいことを引き出すには、よほどの努力が必要だ。尋常な聴取では、こちらが聞きたいと思うことは引き出せない。

①住民のフトコロ深く入り込む

ーいかにも長い付き合いのような顔をして、相手にぶつかっていく

②「この人は、このご近所のことを本気で考えている！」

ー真剣な姿勢を態度で見せる

③聴取の主導権を握り続ける

ーこちらの聞きたいことに答えてもらう。無駄な時間を作らない。スピード感をもって。情報を持っている人を早めに把握し、質問を集中させる

④攻撃的聴取

ー住民が語りたがらないことも、かまわず質問

⑤教育的聴取

ー福祉の目指すものを住民に納得させる。福祉教育をする気持ちで。

⑤の教育的聴取とは何か。地域福祉とは、どんなに要援護状態になっても、住み慣れた家や地域で安全、かつその人らしく生きていけるように、関係者と住民で協働すること。このことを徹底して頭に入れておくのだ。聴取の間にこのことを忘れてしまったら、とたんに聴取の目標を失うことになる。

住民との話し合いの中で、そうした高い目標を提示したら「そんなのは非現実的

だ」という声が出てくる。それでもぐらつかない。福祉の理想をレベルダウンさせるわけにはいかないと毅然としていなければならない。同時に、なぜそんなに高い目標を設定しているのかについて、住民に理解させ、納得させる努力も欠かせない。

3.聴取が成功するための基本条件

①ご近所ごとにマップ作りをする

ー数百世帯の町内を一挙に作るのは厳禁

②ご近所から最低５人は集まってもらう

ーご近所に在住の人に限る

③できればこちらが求める人材を

ーご近所の人間関係をよく知っている人。プライバシーにこだわらない人。世話焼きさん。オープンな要援護者。福祉問題がよく見える人。

④住民の少数精鋭とケア会議というやり方も

ー多人数が集まると、住民は周りの人を気にして情報を出さない

⑤「プライバシー」問題では毅然とした姿勢で

ー「その人を助けるか、プライバシーを尊重するか」の選択

特に①と②は絶対守る。②ご近所外の人で、そのご近所のこともよく知っている人もいることはいるが、「知っている」というのは、要援護者の所在であって、その要援護者にだれが関わっているかは近くの人でないとわからないのだ。

④の問題。たくさんの住民に集まってもらったのはいいが、お互いが牽制し合って、認知症の人などについて全員が口をつぐんでしまう、ということが起こる。こういう場合、マップ作りで見えてきたそのご近所の世話焼きさん数名を呼び集めて、関係者と一緒に再度マップ作りをするのだ。これなら情報は何でも出てくる。マッ

プ作りの場は秘密会の性格を持っている。ケア会議の場でもある。そこに住民がだれでも自由に参加してもいい、とはいかない。だから、そういう重要な情報が出しにくい状況になったら、今述べたやり方に切り替えるのも一つの方法だ。

実際にマップ作りの場ではどんなことが生じているか。

■クレームを出す人がいたら、「とにかくマップ作りをやってみましょう。終わった後で議論に応じますから」と言うと、最終的には何も言わずに帰っていく。

■「助け合いをしたいのか、それともプライバシーを守りたいのか」の二者択一になる。**これはじつは「二者択一」になりえない。人は助けなければならないからだ。だから、クレームが出て来てもそれを情熱で押し返す「強さ」が必要。現に、「町民を絶対に助けるのだ」という情熱を持った自治会長は、そんなクレームは難なく蹴散らしている。人助けには強引さも必要なのだ。**

■マップ作りの場で、ある高年男性がこんなことを言った。「俺の足元に鬱の人がいる。しかし俺はそのことを周りの誰にも言わない。『言わない』ことが、俺のその人に対する福祉活動だと思うよ」。私はその男性にこう問いかけてみた。「もしその鬱の人が、鬱が原因で何か困ったことが生じたら、誰が助けるのでしょうか？」。その人が鬱であることをだれも知らないのだから、助けようがないのだ。すると彼は目をじっとつぶったままで、結局は何も答えなかった。

「プライバシーを尊重しようという人は、人を助ける気はない」。極論に見えるが、そう理解してほぼ間違いないと思う。プライバシー尊重と助け合いは「対決概念」と考えた方がいい。

■関係者の中にも、マップ作りの場で住民の問題をあれこれ話し合うことに、後ろめたさを感じる人もいる。民生委員から、よくそんな悩みを聞かされる。あるテレビ番組でマップを紹介してもらった時、その場に参加していた社会福祉協議会の職員が、「マップ作りの場で自分のことが話し合われるのは気持ちが悪い」と発言した。「後ろから弾が飛んできた」ことに、私はショックを隠せなかったものである。

福祉とは、当人は知られたくないし、言いたくないことを敢えてさぐり出し、社会にさらけ出して、時には当人の意思に反して、強引に助けの手を伸ばしてしまうことでもある。「きれいな営み」とは言えない。自分のことがマップ作りの場で俎

上に載せられて話し合いをされるというのは、できれば避けたいことだろう。しかし、それをやらねば救えないのだ。その救いの実践者であり推進者が福祉関係者なのである。関係者本人が「気持ちが悪い」と言ってしまったら、おしまいだ。

■マップづくりは、ご近所の人たちの普段の私的な営みを把握する作業である。だから、ご近所さんに聴取する場合、いかにも公的な営みのようにするのはうまくない。**私的な営みの把握には、聴取のやり方も私的なやり方を取る必要がある。ベストのやり方は、ご近所さんたちで井戸端会議を開く中でマップができてしまうということだろう。**自治会役員や民生委員、社会福祉協議会のスタッフなどは、その後方支援、協力者役でいい。そこまで引くのだ。

ご近所の人たちが井戸端会議を開き、その成果を住宅地図に乗せることが、「個人情報」の問題になるだろうか。マップ作り自体が私的な営みであれば、井戸端会議の中身を誰かに公表する必要はない。「会議」をひらいた人たちの胸の中に収め、その後の福祉活動の題材として生かしていけばいいのだ。ご近所の人たちにも、あるいは他のご近所の人たちにも伝える必要はない。

マップを作ること自体を自治会長に報告、ないしはお伺いを立てる必要も、本来はないのだ。「今日はだれとだれで井戸端会議を開きます」と報告する人はいないのと同じだ。

現実には、マップを作ろうとしても自治会長の理解を得られずに断念しているケースがあまりに多い。だからマップづくりを公的な営みから引き離して、ご近所での私的な井戸端会議という営みにしてしまうという手もあるのだ。現に民生委員は、自分の担当地区内で住民と一緒にマップづくりをしている。自分の活動のヒントにするのだから、誰からも文句を言われる理由はない。それと同列にあると考えたらどうか。

■「ここだけの話ですが」バウムクーヘン型プライバシー論

「ここだけの話ですがね」ー内緒話をする時の枕詞である。「ここだけ」に限って話します、それより外の人たちには聞かせない、ということだろう。

「ここだけ」の「ここ」にはいろいろな範囲がある。その会場に集まった人たちとか、家族や親族だけとか、クラスの中だけとか、班内、町内など、いろいろある。その場合、そこで話される話は、その中の人たちだけのプライバシーということができる。大抵の場合のプライバシーとは、家族だけしか知らないことで、よその人には聞かせない、知らせない、知られては困る、という話である。

■班ごとマップはなぜうまくいっている？

しかしプライバシーはそれだけではない。その組（班）だけのプライバシーというのもある。組の人たちには知られても仕方がない、防ぎようがない、しかも知っておいてもらわないことには、いざという時に困る。しかし組の外の人には知られたくない。知られても、助けてくれるわけではない。

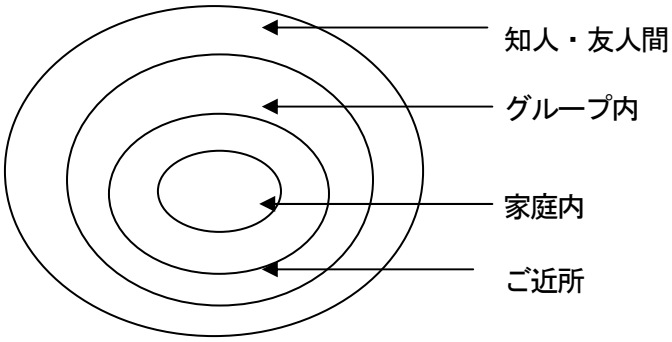
そこで私たちは「班ごとマップ」を提案している。町内単位でマップを作ると、自分のプライバシーが侵される心配があるということで、なかなかマップづくりができない。だからそれはあきらめる。その代り、班ごとにマップを作るのなら構うまい。知られては困るという人もいるが、この範囲では既にプライバシーは知られてしまっているし、だからこそ、いざ困ったとき助けてもらえるのだ。というわけで、班ごとマップはうまくいっている。

■二階幹事長の怒りに一理あるとすれば…

さて、話はまだ続く。どうやら、プライバシーというのは、バウムクーヘンのように層になっているのではないか。一番真ん中が家族・親族のプライバシー。次が向こう三軒両隣のプライバシー。お隣さんには、どうせ知られてしまっているし、まあ仕方がないかという範囲。その次がご近所。ちょっと範囲が曖昧になるが、家から数十軒の範囲。次が友人・知人の間のプライバシー。これはしょっちゅう使われている「俺たちだけしか知らないこと」で「他の人には言わない」という暗黙のルールがある。それからグループ内のプライバシー。今回起きたのがこのレベルのプライバシーの問題だ。

東日本大震災を巡る失言で、今村雅弘氏が復興相を辞任した。この件で、彼の親分の二階幹事長が「政治家が何か話したらマスコミが余すところなく記録を取って、

一行でも悪い所があったらすぐ首を取れとはなんちゅうことか」と述べたという（読売新聞）。そして彼はこう付け加えた。「そんな人は初めから排除して（会場に）入れないようにしなきゃダメだ」



人によっては、反省の色も見せない、部下をただかばうだけの二階氏に不可解さを感じた人もいるのではないか。

■「部外秘」の会合にすべきだったかも

彼にも言い分がある（と本人は思っている）。今村氏が語ったのは、グループ内の仲間に対してであって、それ以外の人たちに聞かせる意図はなかった。つまり二階氏の派閥内のプライバシーだった。そこで「ここだけの話」がゾロゾロと出てきた。その内緒話を外部の者たち（マスコミ）が、「聞いちゃった」とばかりに報道してしまった。ルール違反だと二階氏は憤慨しているのだ。

マスコミの言い分もあるだろう。公職にある者は、どの場であろうと、その発言には責任が伴うものだと。そんなバウムクーヘン型のプライバシー論なんか知ったことではない。

そう言われれば、ひとたまりもないが、凡人の私たちは、「ここだけの話」を喋りまくっている。特に家庭内では、お互いにかなりやばい話をしているのではないか。深く考えずに差別的な言葉を使うこともあるだろう。

二階氏の言っていることを、彼の側から読み直してみたら、彼の言うとおりに、「部外秘」の会合にすべきだったかもしれない。部外者は入れない。そこでは派閥内の仲間だけに語っていい、やばい話も出てくるが、誰はばかることなく語れる。「派閥の仲間だけのプライバシー」という主張を、きちんと実行すべきだったかも

しれない。例えば首相番記者と本人との懇談会があるそうだが、ルール作りがしっかりできているからか、そこで出てきた首相のやばい発言は絶対に表沙汰にはなっていない。ルールが守られている。

4.取り組み課題が出てくる聴取法

①その地域で「ありうる問題」をこちらからぶつける。
ーその中のいずれかに住民が反応する。

②「ありうる問題」の具体例をいくつか披露する。
ー住民にその問題のイメージが湧きにくい場合に。

③「ありうる問題」への対応策も具体的な実践例で紹介する。
ーこういう対応活動例がありますよ、とか。

④呼び水で住民から活動例が出たら、すかさず反応する。
ー住民の実践を生かした取り組みを提案する。

聴取によって問題と取り組み課題が出てくるために求められるのは、聴取者の徹底した主導性である。聴取者が「ありうる問題」をぶつけてみる。それをなるべく具体的な事例で紹介する。同時にその解決策も具体的な事例で示していく。

そうした聴取者からの圧倒的な攻勢で、住民も反応せざるを得なくなり、思い当たる問題や具体的な事例をしゃべり始める。

解決策も同様に、聴取者が「こんな解決行動がある」という事例を次々とぶつけていくことで、住民も「そういうことなら、こんな活動がある」と言い出す。

そこまでいけば、あとはその住民の活動を最大限に生かした取り組み課題を考えればいい。住民は終始受け身だから、聴取の成否はこちら次第なのだ。

＜第３章＞

住民の関わり合いさがし

マップづくりで、福祉問題や解決方策を抽出するためにとりあえずやることは、住民の関わり合いの実態を線で結ぶ作業である。誰と誰が交流しているか、誰に誰が関わっているかなど。その線引きの中から問題や解決のヒントが見えてくる。

①住民の支え合いを第一義と考えること
－要援護者にはまず住民が関わるべきだと説く

②「あまりない」は「少しはある」ということ
－そのかすかな関わりを徹底的に追及していこう

③引きこもりの人も、２、３人との関わりはあるはず
－どんなに引きこもりでも、誰かには門戸を開けているものだ

④身内と思って真剣に考えてもらう
－相手を他人事と考えていては、大事な情報は引き出せない

⑤線が引けなかったら、再度隣人に聴取
－住民同士の関わり合いはごく近くの人しか見えない

■「見守りネットは既にできている」？

そのご近所に既に見守りネットワークができているケースがある。あるご近所でのマップ作りで、一人暮らし高齢者の一人ひとりについて見守りの状況を聞き始め

たら、ここでは既にネットワークができていると民生委員が言い出した。そして、「ここからここまでは私が見ている」と、〇〇活動員と称する女性が。また「ここからここまでは私が」と、別の活動員も。そして何かあれば、民生委員に伝える。民生委員はそれを関係機関に伝える。だからこの地区では個々の見守りについて検討する必要はないというのである。

このやり方に問題があるとすれば、その活動員でない隣人たちは、足元の人の安否を確認するといったことをやらなくなるという点だ。日本人は特にそういう性向が強い。きちんとしたお役目の人が入れば、部外者の私は入るべきではないと。

もう一つは、要援護者の異変は、その人のすぐ近くにいる人しかわからないということである。要援護者の隣人なら、相手の異常にすぐ気づくはずだ。この利点を無にしてしまったのではないかと気がかりである。

さらにもう一つ、気になることを言うならば、相手の異常に気が付くのは、誰でもできることではなく、やはり独特のセンスが求められるということで、〇〇活動員たちがそのセンスを持っているかどうかも気になる。マップを作るとそういうセンスの持ち主がだれであるが見えてくる。実際に関わりの線を引いていくことで、その人材が見えてくるはずだ。マップ作りはまさにそのためのものなのである。

■どれだけ引けたか－福祉の線

支え合いマップづくりで最も重要なのは、住民のふれあいや助け合いの営みを、線で結んでいくことである。ＡさんとＢさんが日常的に交流しているのであれば、相互交流を意味する往復の線で２人を結ぶ。Ｃさん宅にＤさんとＥさんとＦさんがしょっちゅう集まって井戸端会議を開いているとか、一人暮らしのＧさんに隣のＨさんがよくおすそわけをしている、といった情報も、線を引きながらのせていく。

■たくさん線が引ければいいのか？

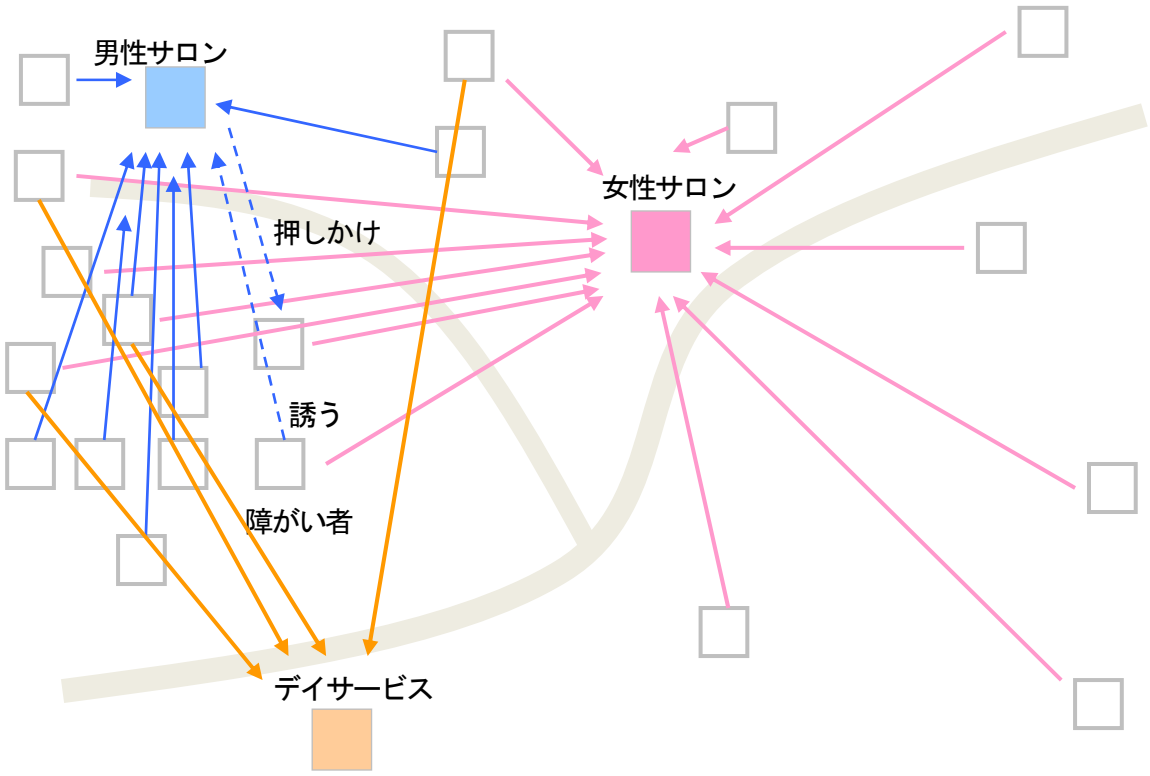
それはいいのだが、実際にそういう関係の線を引いてもらうと、それこそ、むやみやたらに線が引かれていって、マップは線だらけとなる場合もある。ではそれだけたくさんの線が引けたのだから、さぞかし助け合い盛んなご近所なのだろうと想

像するが、どうもそういう感じではない。何かが足りない。

■公民館に向けてたくさんの線が引けても…

初心者が作ったマップを見て、一体どういう線を引いているのかを点検すると、最も多いのが「ふれあいサロン」に参加する、あるいはカラオケの会に参加する、ラジオ体操に参加する、趣味の会に参加するといったものだ。そういう集まりは、大抵はご近所の近くの公民館や公会堂で開かれているから、その公会堂へ向けて、ご近所内の多くの家からそこへ向かって線が引ける。

ではそれらの線が、福祉的に見てどういう意味があるのかと考えてみると、率直に言って、それほど評価すべきものとは言えない。



■では、「意味のある線」とは？

福祉関係者の一般的な傾向として、「ふれあい」というものに高い価値を置いている。だからふれあいサロンや居場所づくり、世代交流のようなふれあいイベントに力を入れていて、それがうまくいくと、福祉がうまくできたという評価がされる。

だがこれが、正確には「ふれあい」がうまくいったのであって、福祉がうまくいったとは必ずしも言えないのである。

先日、宮崎県小林市で住民と一緒に作ったのが、ここで紹介するマップである。ここではどういう「関わり合いの線」が引けただろうか。この中で意味のある線はどれだろうか。

■男女別々にふれあいサロン

マップの中の２つの場に線が集中している。真ん中が女性を中心としたふれあいサロン。左上では、この男性宅の離れに男性が集まっている。カラオケのセットもあるが、中心は飲み会ということらしい。女性と男性が別々に開いているのも面白い。

この中の男性のサロンは、福祉的に言っても意味がある。男性の場合、こういう飲み会の場さえできていないご近所が多いのだから、立派なものである。主催者は、いかにも世話焼きさんという感じである。男性の世話焼きさんは珍しい。

■サロンに参加させてもいい人がいる

ところで、この男性向けのサロンに、もっと来ていい男性はいないのかと調べると、２人いた。

❶要介護の男性宅へ「押しかけサロン」はいかが？

１人は要介護の男性。主催者の男性も含めて、彼をサロンに誘おうという考えは持っていなかった。この人を誘うことはできまいかと聞いたら、「体力的にちょっと無理かな」という。ならば、その家に「押しかけサロン」を開きにいったらどうかと言ったら「それは無理」という言い方はしなかった。大体こういう引っ込み思案の男性も、押しかけられれば受け入れるということがわかっている。相当偏屈と言われる男性も、なぜか押し掛けた人は受け入れる。そんな話をしたら、みんな「いや」とは言わなかった。ここでサロンから彼の家へ向かって線が一本引ける。これが「福祉の線」だ。

❷身障者をサロンへ誘ってみたら？

もう１人は、身体障害者の男性。彼については、「誘えば来るかもしれない」という話が出た。「いや」ではないということらしい。これが第二の「福祉の線」だ。

問題はだれがどのようにして運んであげるかだが、そんなに遠い距離でもないのだから、難しくはないだろう。

❸農業を引退したばかりの人に異変が多い

前述の要介護の男性について、農業を引退してから気力がなくなったという話が出た。「それならこの人もそう」と名前があがった男性は、やはり農業を引退してから異変が見られ、認知症の疑いが出始めているという。「農業を引退した時が危険」という、重要な問題が出てきた。

認知症の疑いが出てきた男性は、両方のサロンに参加している。両方のサロンで見守られているのだから、この２本の線も福祉的な意味があるわけだ。

❹デイ利用者も全員受け入れるサロン

女性のサロンで意味があると思われるのは、このご近所でデイサービスを利用している人はすべてこの女性サロンに受け入れられていた点だ。こういうサロンは、私が全国でマップづくりをしていて、初めて発見した。そういう話をしても、女性たちは別段珍しいことをしているわけではないといった顔をしていた。

このサロンの特徴は、体操、歌、踊り、旅行など、様々なお楽しみをしている点だろう。そこに要支援の人も受け入れているのだから、これ自体、介護予防効果が見込める。立派な福祉である。サロンの日には誰かが相乗りをさせてあげているらしい。送迎もやっていたのだ。

■防災マップの前に支え合いマップ作りが必要な理由

先日、ある町で防災マップ作りを頼まれた。二か所で作ることになり、一つは社会福祉協議会のスタッフが担当した。

すると、社協スタッフの担当した分は、割合簡単にできてしまった。気になる人

と言えば、ご近所ではわずかな人数しかいない。その人に誰が関わったらいいのかは、ご近所の人たちはすぐにわかってしまう。

■避難誘導すべき人は老人クラブやサロンから排除されていた

然し私の方は、方針を変更して、防災と支え合いの二つのマップを同時に作ってみることにした。重点は支え合いマップの方だ。そこで驚くべきことがわかってきた。私も、今まで迂闊にも、このことに気づいていなかった。

他の地区で作ってみても同じだが、この地区でも老人クラブやサロンといった住民グループに要援護者を仲間入りさせていない。デイサービスを利用している人も同じ。一人暮らし高齢者もそういうグループにはほとんど加入していない。つまり、災害時に避難誘導が必要な人は、普段、地域グループの仲間に入っていない。

■「誰かれ構わず駆けつける」ご近所にするには…

そのことに全く気付かないままに、防災マップでは、近くの誰が避難誘導するかを、機械的に決めていく。しかし、いざ災害が起きた時に、その人が在宅であるかどうかの保証はない。となると、その時、その場にいた人が駆けつけなければならない。つまり、災害時には結局、「誰かれ構わず」駆けつける必要があるのだ。その時に問われるのは、普段その要援護者は周りの人たちと日常的に交流しているかどうか、である。

もし地域のさまざまなグループが要援護者を仲間に入れていれば、その人の周りの、複数の人が「グループの仲間」として駆けつけることができる。老人クラブやサロン、趣味グループなどに所属していれば、ご近所のグループ仲間の誰かが駆けつけることができる。しかし今は、そういう関係ができていないから、専ら、決められた人のみが駆けつけることになり、あまり当てにならない避難誘導体制になってしまうのだ。

■「誰かれ構わず駆けつける」範囲とは？

ところで「誰かれ構わずに駆けつける」範囲とは、どれぐらいなのか。当事者を中心にして、そこから何軒程度なのか。ある地区で、その地区を熟知している町内

会長と一緒にその範囲を探ってみたら、大体数軒の範囲とわかった。極めて小さな範囲なのだ。民生委員に、「自宅の周りの何軒ぐらいまでが『良く見えて』いるか？」と聞いたら、みんな５本の指を広げた。５軒程度しかわからないということだ。

■効果的な防災をしたければ、まず要援護者を地域の仲間に

もし地域のさまざまなグループが要援護者を仲間に入れていたら、当人の周辺に、数名は必ず「グループ仲間」がいることになり、その人たちがいざという時に「誰かれ構わず駆けつける」人材候補になる。こんなに心強いことはないだろう。

だから本当に効果的な防災活動をしたいのなら、避難誘導すべき要援護者を普段、地域グループに仲間入りさせるのが先決だということになるのだ。

＜第４章＞

問題さがし

1.問題さがしの基本的な心構え

聴取を終えて、「問題は見つからなかった」ではいけない。何としても何らかの問題は見つけるのだという強い姿勢が必要だ。

①「問題」さがしのために、聴取をリードする
ー聴取は始めから終わりまで「問題さがし」に徹底を

②問題を予測して質問をぶつける
ー「地域ではこんな問題があるはずだ」ー引き出しを持っていること

③本人は何が問題だと思っているのか
ー本人の困り事は何か。どうしたいのか、願いは何か

④福祉の理想を始終意識する
ー福祉のめざすものを見失ったら、聴くことがなくなる

⑤ご近所の本質的な問題は？
ー個々の要援護者のことだけでなく、地域としての問題も

■聴取は「あら探し」なのだ

聴取の役割は、そのご近所が抱えている問題を探し出すことである。としたら、この役割をきちんと果たすためには、なんとしても、どんな方法を取ってでも、問

題を浮き彫りにしなければならない。一見、問題がなさそうに見えても、それでもあきらめずに問題を探そうとする。これがマップ作りの基本的な心構えなのだ。

福祉問題が何もないご近所など、あり得ない。そして福祉問題というのは、表層からは見えにくい。だからそのご近所に潜んでいる問題を浮き上がらせるためには、最初から最後の一秒まで、「ちょっと気になること」も見逃さずに、様々な角度から質問を繰り出す。聴取はある意味、「あら探し」だと言ってもいい。

■「この地区には問題がない」、と思いたい？

マップ作りに際して私は、その目的は取り組み課題を見つけることだと、必ず言うことにしている。ところが、マップ作りが終わって、改めて振り返ってみたら、住民は「この地区には問題がない」のだと思いたいし、だから問題があっても、それを胸の中にしまってしまうということに気が付いた。

つまり問題を探そうという気がもともとないのだ。参加者は、この地区はいい所だということを再確認したいのである。だから、今日はマップ作りで特別、気にかかる問題は出て来なかったとなれば、満足する。それに負けてしまっては、問題は何も出てこない。

■マップ作りの場で福祉を考えることに気乗り薄？

変な話だが、マップ作りの場は必ずしも福祉を考える場にはなっていないということに気付いた。参加者は、「今日は福祉を語る場だ」とは強く言われていないので、そんな意識はないままにマップに向かう。住民が集まる場合、これが常である。だから福祉の問題が出てきそうな場合も、住民の側はなるべくその話を避けようとするのが普通だ。

サロンの話では、ただ誰が参加しているといったことは口にするのだが、要援護者をサロンに誘おう、一人暮らし老人も誘おうといったことは、あまり話に出てこない。こちらは話をそちらに誘導しようとするが、いまいち関心がそちらに向かわない。一人暮らしの人や老々世帯がサロンに来ていないか、確かめても、参加者は

あまり関心がない。

「ただのサロンは公民館で言えば生涯学習、文化活動です。そのサロンに要援護者を仲間入りさせると福祉活動になるのです」と私は言うことにしている。ただの文化活動でなく、またはただのふれあい活動でなく、それが福祉の営みになるには、どういう要件が具備されなければならないのか、どういう活動を加えたらいいのかについて、予め住民にレクチャーしておいた方がいいのかもしれない。

「デイサービス利用者もサロンへ」という考え方を理解してもらうには、もう少し突っ込んだ説明が必要だ。一般的な住民の認識では、そんなことは非常識だとなっているはずだ。もう弱ったのだから、デイを利用すればいいというのが住民の常識なのだ。「いや、要介護になってもサロンに参加できるようにすべきなのだ」ということ、これをどうやって住民に納得させたらいいのか、意外に難しい課題である。

やはりマップ作りをする前に（できれば直前に）、助け合いの大切さやそのやり方、福祉の基本精神などについて、一定の理解をしてもらうための教育活動が必要だ。

■「ここは何も問題がない」？

ある市の社会福祉協議会から支え合いマップづくりを頼まれたが、どうしてこの地区のマップを作る必要があるのか、気になっていた。一度社協でマップを作ったが、特別問題が見つからなかったようだ。

マップづくりには約５０世帯のご近所の世話焼きさんたちが数名参加してくれた。その中に飛び切り優秀な人も混じっていた。その人が中心になって、「気になる人」を探し、誰が関わっているかといったことを聴取し始めた。

そこで見えてきたのは、たしかに問題がない地区だということだ。一人暮らしもいることはいるが、それも数名で、しかも５０代の人ばかりで、「この人たちはまだ元気で働いているよ」というから「気になる人」の中には入らない。老々世帯は若干多いが、その中には例えば老々介護といったケースはほとんどない。世話焼きさんは言った。「ここは問題がないんですよ」。

■デイ利用者と施設入所者が合計１６人も

しかし、それにしても「気になる人」がいなさすぎる。別にたくさんいる必要はないのだが、なんとなく異様ではある。

そこで、介護保険サービスを受けている人はどれぐらいいるのか、聞いてみることにした。

まずはデイサービス利用者。ご覧の通り、６名いる。次いで老人ホームに入所した人。マップの外に「入所」と書いたところへ向かって線を引き始めたら、次々と出てきて、結局１０名もいた。わずか５０世帯のこのご近所の中の、１６名がデイサービスを利用したり、施設に入所していた。

何のことはない、「気になる人」はすべてこれらの施設へ行ってしまっていたのだ。残された人に「気になる人」はほとんどいないのも当たり前であった。

地元の人たちは、この１６名は自分たちの関わりの対象から外れた人だと考えていた。「このご近所は何も問題がないんですよ」と言ったのは、そういう意味だったのだ。

■１６名でサロン参加者はたったの１人

本当にそうなのか。では「問題の人」がいないこの地区で、世話焼きさんたち活動家は何をしているのか。今流行のふれあいサロンを開いていた。参加者はマップにある通りで、かなりの人が参加しているから、「盛況」と言ってもいい。

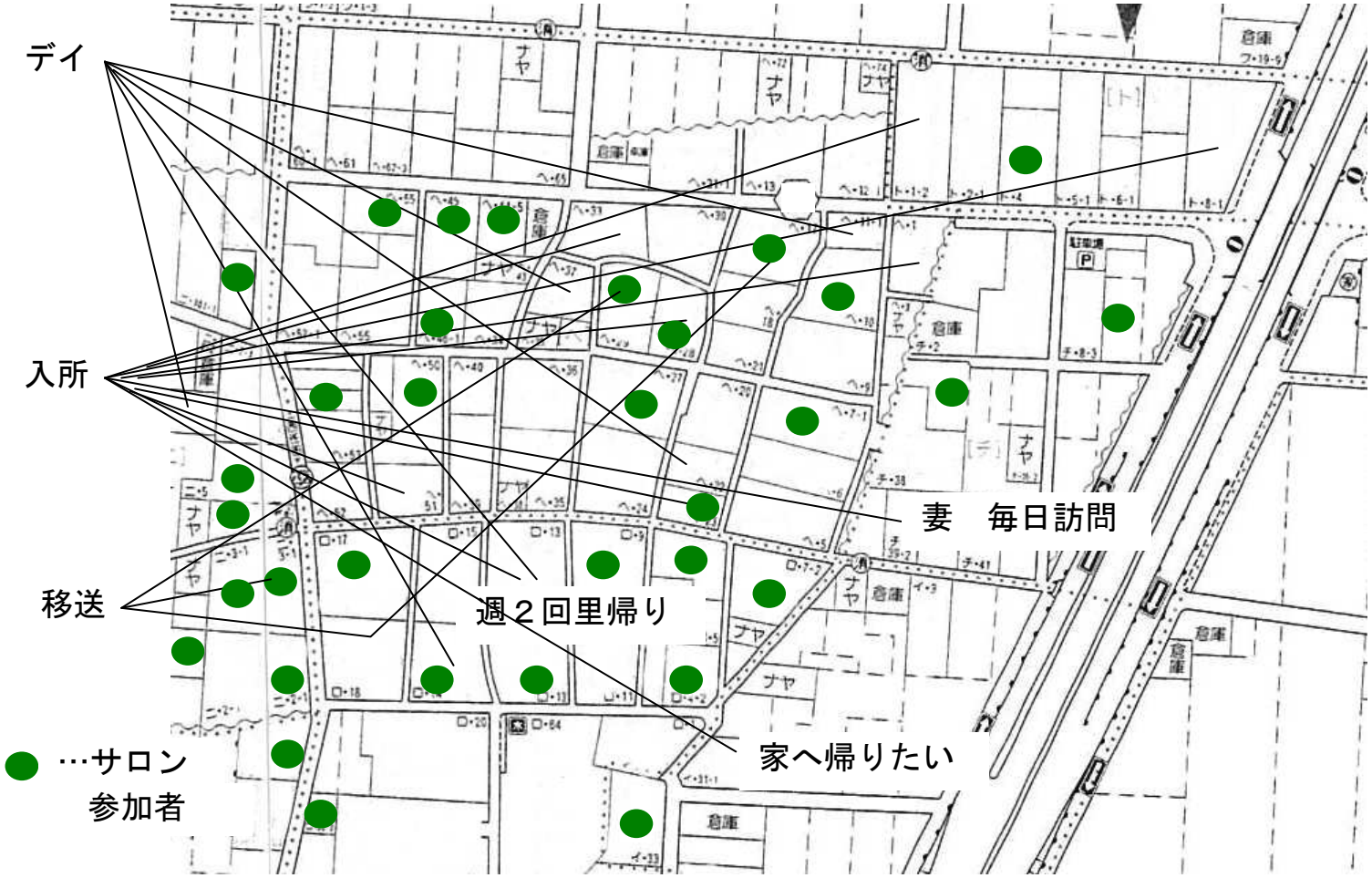
ここからクロス集計を試みてみた。サロン参加者と、施設入所者やデイサービス利用者が重なっているケースは何人か。２人いたが、その中の１人は、サロンに参加しているのは実は子どもで、親は入所していて、サロンに参加しているわけではなかった。つまり、結局サロンに参加していたのはたったの１人。この人は要支援だが、かなり積極的にふれあいを求めていく人で、その元気でサロンにも来ていた。

デイ利用者をサロンの仲間に加えること、これがサロンを開いている人たちの大事な「活動」ではないのか？

もっと言えば、施設に入所していても、サロンに里帰りさせることだってできる。それもまた課題になる。

■週２回里帰りしている人も

施設入所者１０人の中で里帰りをしている人を探したら、１人いた。それも、週に２回里帰りをさせているというから、ずいぶん熱心な家族である。


デイ
入所
移送
…サロン
参加者
妻　毎日訪問
週２回里帰り
家へ帰りたい

ではこの人が里帰りした時、地元の人が受け皿になってくれているかと言えば、そうではなかった。せめて里帰りした時に皆で訪問してあげればいいのだが。

聞くところによると、施設はここからそう遠くない。一番遠い施設でも３キロ程度というから、施設を訪問することも、また里帰りをすることもそう難しくない。要するにこの人たちは自宅の「離れ」に住んでいると考えればいいのだ。だから週に２回も里帰りをさせる家族もあるわけだ。

こういう場合に、誰かが送迎サービスをしてあげればいい。ちなみに送迎サービスをする用意のある人はいないかとマップ上で探したら、３人見つかった。既に（施設入所者にではないが）実践している人もいる。もっと志望者を募れば出てくるのではないか。

そんな話をしていたら、「この人は家に帰りたがっている」という人も見つかった。何とかしてあげなければ…。逆に、入所した夫を、毎日訪問しているという女性もいた。

■１６名は全部老人クラブの会員だった。ならば…

世話焼きさんに聞くと、ここは老人クラブの活動が盛んであるらしい。ほとんどの人が入会している。つまり高齢になれば加入することになっているということだ。では、施設に入所した人はどうかと聞くと、やはり、形だけだが入会しているという。ならばクラブの例会やイベントにも参加させるべきである。送迎班を編成して、送迎をする。介助人も同時に組織化する。介護経験者がメンバーの中に、少なくとも７，８名はいるはずだ。

■「住み慣れた家や地域でその人らしく」は無理なのか？

私は他のマップづくりの場でも、同じようなことをしている。デイサービスの利用者と施設入所者を特定する線を引くと、デイ利用者と施設入所者がそれぞれ５本程度引ける。この地区は、デイは平均値としても、施設入所者が異常に多い。

その上で、この人たちにどんな関わりをしているかと問うと、参加者は「？」と首をかしげる。「この人たちはもう施設に行ったり、利用したりしていて、地域にはいない人です」と言うのだ。

しかし「いない」とはどういうことか。彼らも施設で生きている。デイ利用者は夕方には帰宅するし、週のうち大部分は地域にいるのだ。

だから、物理的にいないというよりは、彼らの意識の中で既に不在になってしまっているということなのだ。そこで私は厚労省の言っていることを参加者に伝える。国がめざしていることは、「どんなに重い要介護になっても、住み慣れた家や地域

でその人らしく生きていけるように支援すること」なのだと。少なくとも本人はまだ地域で生きている気持でいる。段々とあきらめていくのだろうが。

■地域ではますます「棲み分け」が進行

そこで、ここで述べたように、まだ地域と繋がっていたいという本人の願いに沿って、対応していかねばならないということだ。

課題は既に述べた通りで、①施設訪問、②里帰りの受け入れ、③サロン等への受け入れ、④老人クラブの活動への参加受け入れ、⑤そのための移送サービスや、⑥介助人の配置、⑦できることなら自宅復帰。

しかし現実はますます暗くなっている。介護保険制度が始まって以来、地域での「棲み分け」が進行する一方である。要介護になったら介護保険制度を利用すればいい。そして施設に入所したり、サービスを利用すればいい。この流れを押しとどめようとする勢力が不在なのが最も気になるところだ。

2.「気になる人」さがし

「気になる人」とは、福祉課題を抱えた人のこと。ではその人はどういう課題を抱えているのか。以下の４項目を確認する。

①安全は守られているか？

－見守りはきちんとなされているか。危機対応は十分か。
日々見守る体制はできているか。何かあった時の連絡体制は？

②困り事はないか？

－本人の困り事を突き止めているか。
本人が意識しない、隠れた困り事もある。

③介護や介助はきちんと行われているか？

－プロの関与は十分か。住民による介護サポートは？
家族の支援までなされているか。

④「その人らしく」生きているか？

－本人がこだわっているものに関わっているか。
豊かさダイヤグラムは満開か？

■気になる人とは、迷惑な人だった！

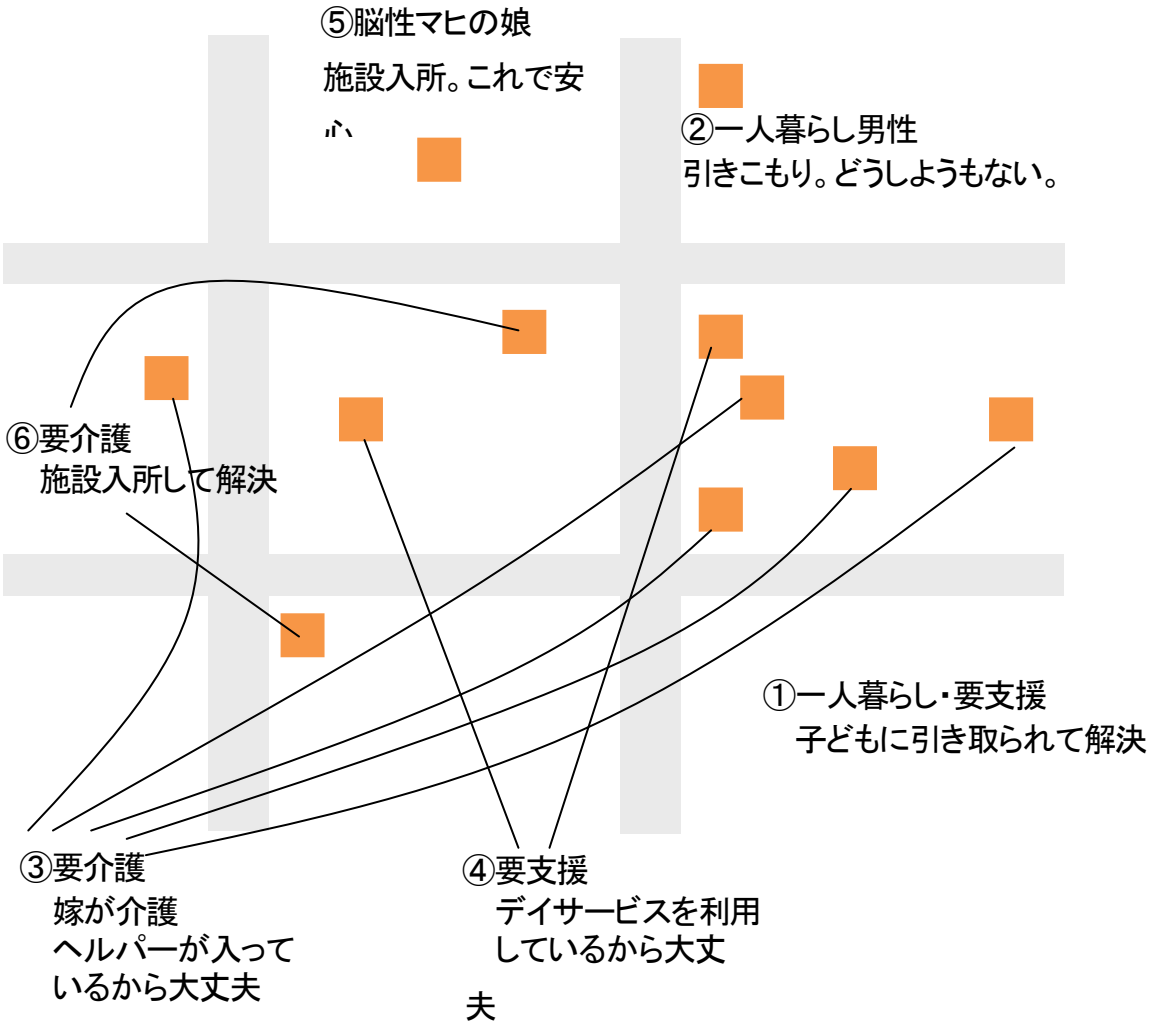
住民にとって「気になる人」とは誰のことだと思われるか。意外なことがわかった。私たち関係者にとって「気になる人」とは、一人暮らし高齢者とか要介護者、要するに援護を必要としている人のことだろう。

ところが住民はそうは考えていなかった。多くの人にとって「気になる人」とは、彼らから見て迷惑な存在だったのだ。暴言を吐く、ラジオを大音響で流す、ゴミ屋敷や猫屋敷。「今のところ私たちに迷惑をかける人はいません」と民生委員が締めくくった時、私は唖然としたものである。

■「気になる人」はいない？

下のマップは、ある社会福祉協議会のスタッフが作ったもので、「マップを作ってみたが、特に気になる人は見つからなかった」と言っていたが、このマップにあるような考え方でマップを作っていては、何度マップを作っても、気になる人は出てこないのではないか。

①から⑥までの各項目について、本当に気にならないのか、皆さんも考えてみていただきたい。



■卒業させない

■超高齢になれば地域活動は卒業？

先日、福岡県の福津市で、社会福祉協議会のスタッフと一緒に支え合いマップづくりをしていて、おもしろいことに気づいた。３カ所のマップをスタッフが手分けして同時に作ったのだが、取り組み課題を整理していて、地域には一つの大きな問題があることがわかった。

今は超高齢社会と、よく言われる。老々介護の時代だとも。超高齢になれば足腰が弱くなる。耳も遠くなる。妻や夫を介護しなければならなくなる。デイサービスを利用するようになる。老人ホームに入所する人も。そうなると、今まで参加していたサロンや老人クラブなどは卒業だ。畑で野菜を作って、できたものをおすそ分けするといった活動もおしまい。

それが当たり前だと私たちは見てしまう。「卒業」を容認してしまえば、課題というものがなくなる。

■重い要介護でも地域で自分らしく生きられる

では福祉とはもともと何だったのか。厚労省は言っている。どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域でその人らしく生きられるように応援しようと。ならば、そういう人たちを簡単に卒業させてしまったら、福祉は成り立たなくなる。なんとしても卒業させないのが福祉だったのだ。

などと言うと、マップづくりに参加した人たちから、「そんな無茶な」といった戸惑いが生まれる。そういう状態になったらそろそろ卒業させてもいいではないかと。だからマップづくりを主導する者は、しっかり踏ん張らなければならない。「人間は最後の最後まで人間らしく生き切ることが大切なのであって、それを応援するのが本当の福祉なのですよ」と。

＜福津市でのマップ作りで出てきた「卒業」させない問題＞

本人の事情	卒業の対象	卒業させない策
超高齢で耳が遠くなった。「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
１０９歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけサロン」
同上	畑で野菜づくりができなくなった	皆で畑に連れ出そう
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	他にも文化人が多数いるので、教養講座の講師になってもらおう
９０代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	里帰りで自治会活動の参加を応援しよう。組費をまだ徴収していた
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう
長年引きこもっている		密かに犬の散歩をしていた。ならば犬を通したふれあいを広げよう

■住民に納得させる材料を見つける必要が

ただこうした主張をぶつけるのでなく、「なるほど、そういうことなら、やる価値はあるかも」と住民に納得させる材料を見つける必要がある。そのヒントはたしかにあるのだ。

①耳が遠い人には通訳がついていた！

例えば、耳が遠くなったために、サロン等から足が遠のいたというケースはよく

ある。こうした悩みは他の人にはなかなか理解しにくい。だから放っておくうちに、いつの間にか来なくなる。それでも参加しているケースというのは、周辺に、この人の通訳をする仲間がいる場合である。

今回の場合も、やはりいた。ただしその通訳の人が要介護になってサロンに来なくなり、自然、耳が遠い本人も足が遠のいた。だから対策は、新しい通訳を見つけようということになる。そんなに難しいことではない。

②入所者からも組費を徴収していた

施設に入所した人を、自治会活動などにまた参加させようというのは、今の地域の事情からしたら考えられないことかもしれない。ところがこの地域の興味深い慣習が浮かび上がってきた。施設に入所した人からも組費を徴収していたのだ。

つまり「あなたはまだ自治会会員なのですよ」と本人に自覚させようとしているのだ。ならば当然、自治会のイベントには移送サービスをしてでも参加できるようにしなければならない。

③本人が来られないなら押しかければいい

超高齢になれば地域活動から離れるようになるのは当然だろうが、しかし方法はある。サロンには来られなくなったが、仲間が訪問して「押しかけサロン」をすれば、ちゃんと受け入れている。訪問型に切り替えればいいことなのだ。老人クラブも同様の対応ができるはずだ。

④体を使う活動はできなくても、体験を生かせばいい

長い間自治会長などで地域に貢献した人も、超高齢になればそれも難しくなる。しかしこれまでの実績を何かで生かせないものか。そういう人物で、しかも元大学教授だという人がいた。これだけの実績と能力を生かさない手はない。調べてみたら、そのご近所内にたくさんの人材がいることがわかった。ならばこの際、彼らに講師としてその知識と技術を生かしてもらえばいい。それなら超高齢でも、要介護でも可能だ。

⑤足腰が立たなくなったら車で移送すればいい

最も多いのが「足腰が立たなくなったから」であるが、ならば誰かが移送サービスをすればいい。本誌で北海道夕張市の移送サービスについて述べたことがある。公的な鉄道も民間輸送もほとんどが走らなくなった。住民は家に閉じ込められることになる。そんなときに住民は、まさに住民総出で移送サービスを始めた。誰もかれもが、移送の必要な人を運んでいる。つまり夕張市全体が要介護になったと思えばいい。その対策は、住民総「移送ボランティア」になることだった。

超高齢者が地域にたくさんいるようになれば、移送サービスはだれもがやるべき

ことになっていく。それが超高齢社会の地域のあり方なのだ。たった数名の超高齢者の移送ができないというのでは、福祉社会とはとても言えない。

　表にある対象者の多くが「移送サービス」の必要な人ばかりではないか。これに対応する体制を作るのが、基本中の基本というべきである。

3.問題が出てきやすい「気になる対象」

一般的によく問題が出てくる、気になる対象を頭に入れておいて、住民に確認していけば、ご近所の問題に早く気づくことができる。こういう人でこういう状況にある人、地域のこういう問題に特に注意してみたらどうかという事例を表にした。

⑴	**一人暮らし高齢者**	① 男性（５０～６０代から） ② 超高齢男性 ③ 要介護（認知症） ④ 引きこもり ⑤ 女性	孤立死の恐れ。食事は？ まだ運転をしているのか？ 生活の全般に関与 どこかに接点はないか？ 移動手段の確保は？
⑵	**高齢者のみの世帯**	① 老々介護（夫が介護） ② 今は元気だが… ③ 夫の引きこもり	虐待。妻を隠していないか？ 今のうちに夫婦で地域デビューを 妻がグループへ連れ出そう
⑶	**老親と息子**	① 息子が老親を介護 ② 息子が親の年金で生活 ③ 親が昼間一人暮らし	虐待、ネグレクトの心配 親亡き後の生活・息子の自立 昼間の見守りは？
⑷	**要介護**	① 家族が介護 ② 施設入所 ③ デイサービス ④ 認知症の人	家族のストレス。介護者の連帯は？ 里帰りは？　地域活動へ参加は？ サロンや趣味活動への仲間入りは？ 隠さずに支援を求めているか。サロンに受け入れられているか？
⑸	**「迷惑な人」** （と見られている人）	① ゴミ屋敷 ② 猫屋敷 ③ 騒音	本人が見込んだ人を探せ
⑹	**障害児者**	① 老親と障害者（親亡き後） ② 障害児 ③ 精神障害者	子どもの自立 潜在能力の開発 治療。ふれあい。仕事。趣味。

4.こう考えたら「問題」は見えてこない

テーマごとに、一般的にはその事態をどう見るかを並べてある。この見方だと取り組み課題は出てこない。

	対象者	一般的な見方	問題が出てこない理由
①	一人暮らし高齢者	まだ元気で、特別に問題はない	安全の確保だけを目指すのなら、問題は出てこない。「もっと豊かな生活」を目指せば、課題はいくらでもある
②	引きこもりの人	だれとも交流したがらないし受入れないので、手の打ちようがない	問題はあるが、関わる手立てが見つからないという事例。本人は何か（趣味など）にこだわっていないか
③	一人暮らしの女性が息子に引き取られて行った	これで一安心	本人は行きたくなかったのではないか。孤立していないか。当事者の側から見ることができるかがカギ
④	在宅の要介護者	家族が介護しているし、ヘルパーも来ているので問題はない	家族介護に任せきりでいいのか。介護者の人生はどうなる？　それに要介護者も豊かな生活を求めている。
⑤	知的障害者	元気だし家族が面倒見ているから大丈夫。作業所に通っているから、ふれあいも問題ない。	親が見ているから今はよくても、親亡き後はどうするのか。 本人の能力開発もしなければ。
⑥	デイサービス利用者	特別に問題はない。	デイを利用すると地域のふれあいの輪からはずされる恐れも。そのため、ますますデイ頼りになる。
⑦	老人ホームに入所	これで家族も重荷から解放。	要介護でも住み慣れた家や地域で自分らしく生きたいという願いを叶えるのが本当の福祉だ。里帰りはしているか
⑧	高齢者のみの世帯	今のところ二人とも元気で、特別に問題はない。	いずれ老々介護になり、地域に支援を求めなければならなくなる。今から地域との交流をしておかねば。

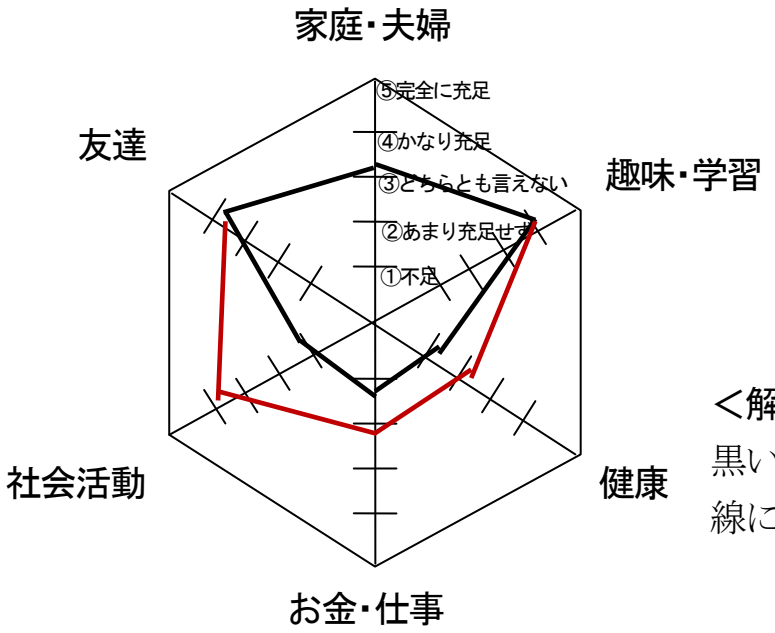
5.ダイヤグラムでその人らしさを測定

気になる人や事に関して、安全が守られているか、困り事はないかというだけでなく、「その人らしい生活」ができているかも点検する必要がある。それがどの程度できているかを測る物差しとして本研究所では豊かさダイヤグラムを開発した。

＜豊かさダイヤグラムの測り方＞

❶自分らしくの充足度を測る「豊かさダイヤグラム」とは？

項目はここにあるように６つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥社会活動。ボランティア。



＜解説＞認知症の女性。黒い線だったのを、赤い線に改善

❷項目別に充足度を５段階で評価し、６つの点を結べば豊かさ満開度が

認知症の８０代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。畑で隣り合った仲間（３人）とおしゃべり（「友達」）。妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。娘も時々やって来る。

＜ダイヤグラムで豊かさ満開にする法＞

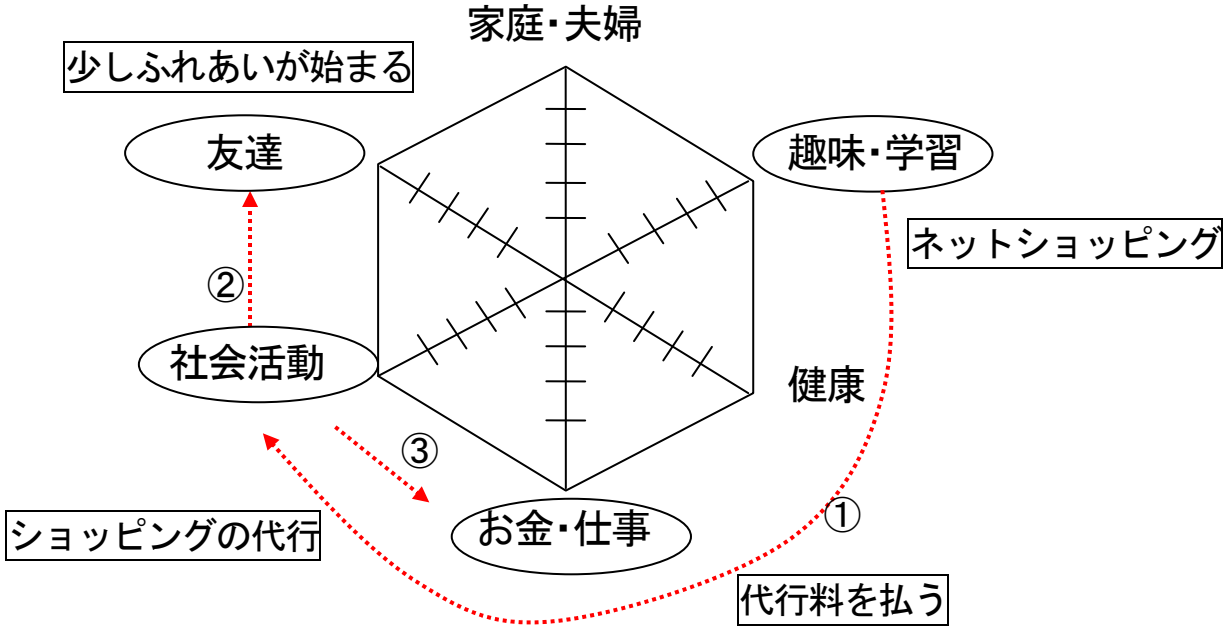
❶どうすれば充足度がアップするか。作戦を考える。

この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作ったおしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実。

❷効率的な豊かさ満開策を考える。

この６つを個別に追究するのは大変だ。それよりも、基点になる項目を選び、それを生かして、ついでに他の項目も充足させてしまう方がいい。

次のダイヤグラム。会社でセクハラに遭って家に引きこもる女性。彼女は何かやっていないかと隣人に聞いたら、何もやっていないと言う。そこで、会社勤めをしていた時、パソコンを使っていたのではないかと聞いたら、その通りだと。では、そのパソコンで今も何かやっていないかとさらに聞いたら、ネットショッピングはしているという。ならばそれに取り付こう。押しかけていって、たとえば高齢世帯などの買い物を代行してもらおう。お礼にいくらか払う。そうこうしているうちに交流ができてくるのではないか。



❸①→②→③の流れが要援護者の場合によく使えるパターン。

要援護者は、人に助けてもらう一方になりがち。「社会活動」が不充足になりやすい。そこで本人の趣味を生かして、人の役に立てるように仕掛ければ、「ふれあい」が生まれ、場合によっては「収入」が見込める。

6.地域の「気になること」

人間のよりよい生活を妨げているものが、地域にはたくさんある。それが要援護者には増幅されて迫ってくる場合も少なくない。店や医療機関がないと、一般住民も不便だが、一人暮らしの高齢者や要介護者になると、その不便さはもっと深刻だ。

地域では、人だけの問題はむしろ少なくて、大抵は以下のような事柄と複雑に絡まり合っているとみていい。そのご近所ではこれらのどれが生活障害になっているか、それが人々や要援護者にどのように影響しているか。これが地域課題になる。

住民
要援護者

- ①家族　老親と独身息子の世帯が多く、将来介護の心配が
- ②集落作り　子供がほとんどいなくて、集落自体消滅の危機
- ③グループ　地域グループが要援護者を排除している
- ④ふれあい　個々のふれあいはあるが集落としての連帯が希薄
- ⑤自治　自治会の脱退者が多く、両者が反目している
- ⑥交通　歩道がない箇所で交通事故が頻発
- ⑦商工業　シャッター通りが増える一方。買い物に不便
- ⑧教育　集落に小学校がなく、遠くまでバスで通学
- ⑨文化芸術　公民館が集落外にあり、要援護者は通えない
- ⑩防災　土地が低く、津波が来たら逃げられない
- ⑪宗教　特定宗教の信者と住民とが溶け合わない
- ⑫ライフスタイル　親戚関係の絆や縛りが強すぎる
- ⑬保健福祉　医療機関が遠くて、みんなタクシーで通っている
- ⑭公共機関　役所が近くになく、住民は不便に思っている
- ⑮風土　坂が多くて、高齢者は公会堂にも行きづらい

7.認知症で一人暮らし－気になりますか？

ある地区でマップ作りをしたら出てきたケース。夫が９２歳。妻はずっと前に施設に入所していたが、この夫も関係者は施設に入所させてしまった。しかも、妻とは異なる施設にだ。夫自身はどう考えていたかと聞いたら、「自分はまだ、地域で自立した生活ができる」と言い張ったが、半ば無理やり入所させてしまったという。その後どうしているかと聞くと、案の定、時々里帰りして、隣人とそば作りをしたりしているのだと。では、妻はどうしているかと聞くと、「家に帰りたい」と泣いているという。

■周りから見たら「危ない」、本人は「大丈夫」。どちらを取るか

入所させた民生委員等の関係者に言わせると、本人は大丈夫だと言っても、客観的に見れば、とても自立生活は無理だと。私はこういう姿勢を「担い手主導」と言っている。担い手が勝手に要援護者の状態を判断し、「措置」してしまった。民生委員等は、ごく当たり前の措置だと、疑問にさえ感じていない。実際には本人は時々里帰りして、知人とそば作りに興じたりしている。「自立した生活者」の片鱗がうかがえるではないか。

こうなると、福祉というのは何なのだろうと思う。その前に、自立生活とはなんだろう。自立生活は無理、という表現にうかがえるのは、誰にも心配をかけずに、独り立ちできる人とも受け取れる。それでは、要介護の人が一人で生きること自体、それだけで無茶ということになる。こういう人が地域で生きていけば、当然、周りの人たちに心配をかけるし、いろいろ生活上の支援をしてもらわねばならない。それは「福祉」というものが存在しない社会のことを言っている。私たちがめざしている福祉社会とは、そういう一人立ちできない要援護者も、周囲の見守りや生活の援助をしてもらいながら、生きていける社会なのだ。そんな支援が期待できない状況では、地域生活をさせるわけにはいかないというのは本末転倒で、それでかろうじてでも自立生活ができるようにするのが、民生委員を含めた関係者の役割なのだ。

■危ないのを覚悟で地域で生き抜く、危ないのを承知で支える

自立生活というのは、どんなに不安定でも、その人なりに、自分の意思と力で、地域で独立した生活をしていこうと努力することなのかもしれない。だから、周りから見たら危なっかしくて仕方がない、それでもできる限り独力で生きていこうと頑張る。

自立生活をこう表現したらいいかもしれない―「危なっかしい生活」と。危なっかしいからすぐに施設に入所させてしまおうと考えるのでなく、危なくすると生命の危険にさらされるかもしれないが、それも覚悟で地域で生き抜くという意志を持った者を、支援が失敗する可能性があるかもしれないが、それでも支援しようとする、そういう世界なのだ。

そういう意味では、今の福祉は「危なっかしい生活」の支援から、ますます遠ざかって行っているように見える。何しろ福祉界が揃って推進しているのが「見守り」である。安全が確保されればいいという世界なのだ。危ない人を摘発して、より安全な場所に避難させる―デイサービスとか老人ホームとかに。

■「自分らしい生活」をするためにこその自立生活

危ないことを承知の上で自立生活をすることに、何の得があるのか。厚労省は言っている。福祉の目的は、どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域で、自分らしく生きていくのを支援すること。これなのだ。超高級な老人ホームに入所した女性が、ケアマネに、もう一度自宅に帰りたいと言ってきた。その理由はこうだ。「施設は私が自分らしく生きているのに向いていない」。こういう凄いことを言う人も出てきた。やはり豊かな社会になったのだろう。

自宅に居て、自分の生きたいように生きることができる。朝起きて、戸を開け、掃除をし、ご飯の支度をし、趣味に興じ、友と語り合い、時には旅行に行く。すべては自分自身の意思で、である。誰かの指示ではない。こういう生活がいかに素晴らしいものかが分かってくるのだ。

そして、危なっかしい部分は、周りの人たちの助けを得る。そのためにこそ助け合いの地域を作らねばならないのだ。危なっかしい人をことごとく施設に入れてしまっては、助け合いの地域は育ちようがない。

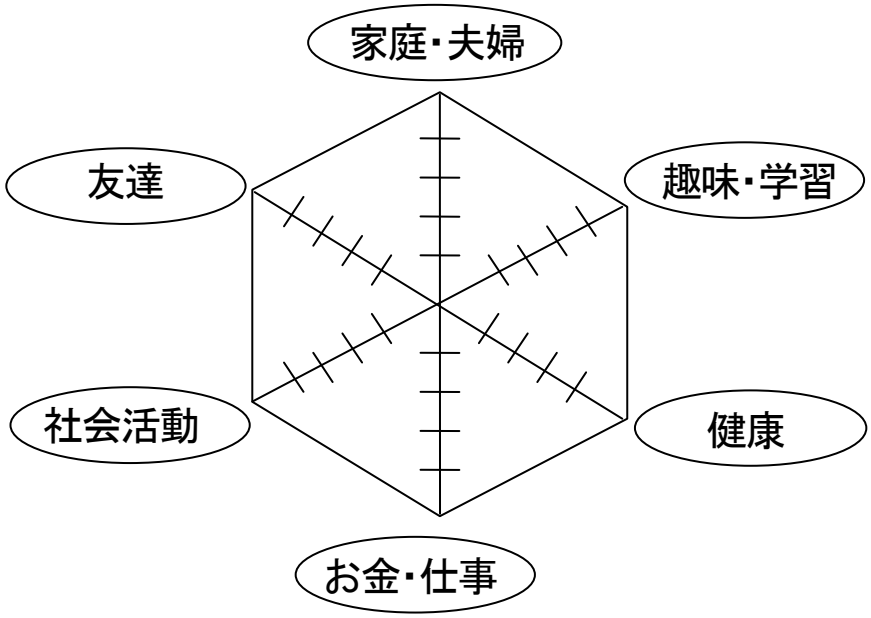
8.究極の目標ー「ご近所で共に豊かに」

⑴誰もが豊かに生きられる「ご近所」

東京都から、ある調査結果の分析を頼まれたことがある。1,000 人の高齢者へのアンケート調査だったが、私の担当は、自由回答の分析だった。たくさんの意見、要望を並べてみて、そこから敢えて何らかの結論を導き出そうとした時、見えてきたものは何か。

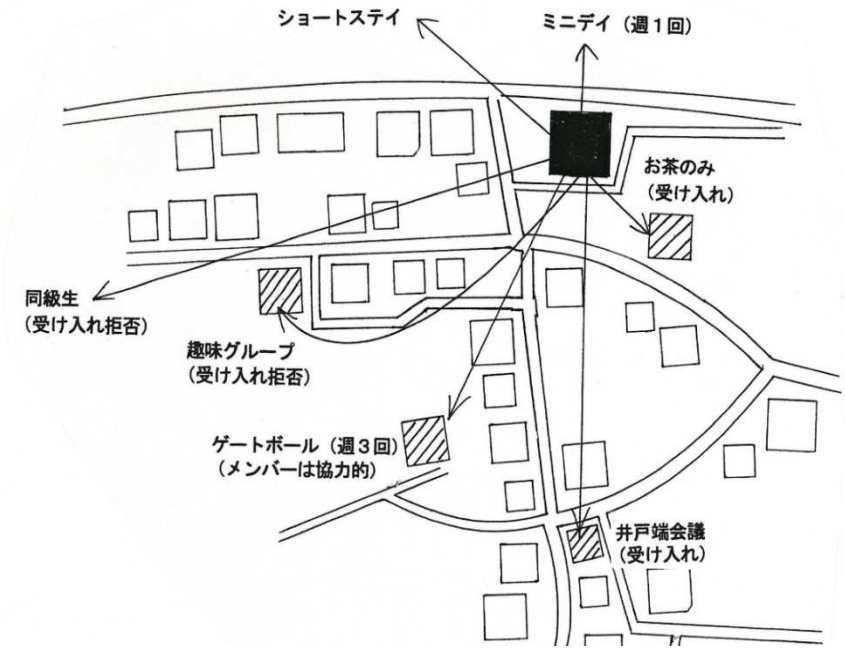
前述の通り、私共は「豊かさダイヤグラム」というものを開発し、活用している。人間が豊かに生きるための６つの要件―仕事、健康、趣味、家族、ふれあい、社会活動―をダイヤグラムにしたものだ。高齢者たちが共通して願っていたのは、これら６つの要素を豊かにする活動が、足元のご近所でできるようにしてほしいというものであった。歩いて数分で働く場があり、趣味活動ができ、健康づくりもでき、ふれあいもボランティアもできる。

今はこれらの一つ一つを充足させるために、市の中心部などへ、車やバスに乗って行かねばならない。それを、自宅の近くでできるようにしてほしいというのだ。



⑵要介護者も自宅に居て豊かになれる

こういう事態が実現すれば、どういう「いいこと」が始まるだろうか。要介護者も、障害者も、足元で豊かになれるということなのだ。今は既に大介護時代に突入している。特に地方に行くと、多くの人が要援護者という、大変な状況が生まれている。しかし今述べたようなご近所ができれば、死ぬまで豊かな生活が、要介護でもできる。厚労省が言っている福祉の目標とは、そういうことだったはずだ。つまり、今ここで提案しているような「ご近所」をつくるのは、これからの時代を先取りするものなのだ。



マップを見ていただきたい。認知症の女性が、わずか３０数世帯のご近所のあちこちに出かけている。そして「私も入れて！」とやっている。このうちゲートボールとサロンと井戸端会議の連中は入れてあげているが、趣味グループと元同級生が排除していた。もしこの全部がいれてあげていたら、彼女はこのご近所で豊かに生きられることになる。やり方次第ではそう難しいことではない。

しかしそれは要介護者にとってであって、元気な人は、前述のとおり、車を乗り継いで、スポーツセンターや公民館、カルチャーセンター、シルバー人材センターなどに行って、それで済んでしまう。その方がよほど、面倒な人間関係に巻き込まれなくていいと思うかもしれない。

しかし、例えばカルチャーセンターに行って、彼らはそれ以外のふれあいや助け合いをしているかと言えば、やっていない。趣味活動が終わったら、皆、さっさと帰っていく、と主宰者は嘆いていた。ただ趣味を習うためだけに来ていたのだ。それでいいではないかと言われれば、それも一理ある。

⑶「共に豊かに」なるために助け合う

もう一度、ご近所で豊かさ活動のすべてができるという案を考えてみよう。住民は６つの豊かさへの要件を総合的に充足させるべく、ご近所内で何度も出会う。つまり「共に豊かに」なるために、同じご近所内の各所で、時には切磋琢磨し、時にはアドバイスをし合う。

これまでのように、市のカルチャーセンターでたまたま顔を合わせても、そこでふれあいや助け合いもしようとは思わない。目的が、ただ単にカルチャーを楽しむことなのだから。しかしご近所で共に豊かに生きようとすれば、趣味活動で出会った相手と、せっかくならふれあいも楽しもう、困り事があれば助け合おうと思うのではないか。そうすることで、効率よく豊かになれるのだから。

助け合いという営みは、それ自体が単純に目的化され、何のために助け合うのかが問われることはない。しかし本当は、ともに豊かになっていくために、人は助け合うのだ。

⑶ご近所単位の助け合いが効果的な理由

「ご近所で共に豊かに」という方式で、ご近所単位で助け合いをすることの利点は、意外に多い。

①小さな町内で日常的にふれあう。そこから助け合いが始まる。

例えば、人々は今は千数百世帯の町民の一人として、個々バラバラにふれあっている。だから町内会として、助け合おうという気運が起きにくい。各自が自分の小さな町内で日常的にふれあう方が、助け合いはしやすい。

②要援護者もニーズを発信しやすくなる

しかもご近所なら、その輪の中に要援護者も加わってくる。その人たちから、さまざまなニーズが発信される。

今までと違い、足元に参加したいグループが近づいてくるから、要援護者もそれに参加しやすくなるのだ。そして、同じグループの仲間に悩みを吐露し、それに誰かが対応するはずである。つまりこの仕組みで、福祉ニーズと資源がグッと近づき、接触する。接点にいる人の誰かが対応する。こうして助け合いが始まるのだ。

③要援護者の自助力が高まれば、自分で資源を確保できる

ご近所では当事者が主導権を取るのが普通になっているが、助けられ上手な人はまだ多くない。当事者の自助力をもっと強力に磨いてもらえば、ご近所という小さな世界で、しかもたくさんの人が町全体からご近所に帰って来るのだから、要援護者の腕次第でいくらでも資源は確保できる。先に紹介した認知症の女性がそうだ。

④世話焼きさんも活動しやすくなる

世話焼きさんは、５０世帯の町内でニーズを探している。見つけたら即刻関わる気でいる。ところが今はその活動対象となる要援護者が、デイサービスなどを受けるために町全体に出てしまっている。または行ける場所がなく、家に閉じこもりがちになっている。しかし要援護者の足元に生きがいの対象（グループ）がたくさんできれば、そこに参加でき、そこで世話焼きさんと出会う可能性が高くなる。世話焼きさんからすれば、活動の対象が足元に急激に増えるので、はりきって関ってくれるだろう。

結局のところ、要援護者の困りごとに関わるのは、世話焼きさんなのだ。世話焼きさんは、相手の困り事を敏感に察知し、素早くかかわる。だから世話焼きさんが活動しやすい環境、ニーズを把握しやすい環境を整えてあげれば、誰に頼まれるでもなく、活動してくれる。地域にどんな福祉ニーズがあるかなどと調査する必要はあまりない。世話焼きさんのアンテナを動きやすくしてあげれば、ニーズを見つけ、対応してくれる。

⑤要援護者が最も望んでいる「その人らしく」にも対応

福祉ニーズといっても、例えば見守りなどは、じつは当事者からすればそれほど重要ではない。見守りそれ自体に大した福祉効果はない。逆に、要援護者本人が最も望んでいるのは、「自分らしく生きたい」。自己実現欲求である。要介護になっても畑仕事をやりたい。このニーズが無視されるのが今の社会である。

だが福祉活動のみならず、住民の様々な趣味活動もご近所に戻ってくれば、このニーズが充足される。あとはメンバーが要援護者を受け入れるかどうか、である。それができれば、最も望まれているニーズが充足されることになる。

⑷豊かな生活ができるご近所をどうつくるか

理想はそうだとして、ではこのようなご近所をどうやって実現させるのか。いく

つかの方法がある。

①今まで町内圏域でやっていたこと－趣味やふれあい、助け合い（サービス）、健康づくりなどを、これからはご近所単位にする。

具体的には、参加者のリーダー格の人が、各自ご近所に戻って、いわば二次会を開く。カルチャーセンターをご近所毎に作るのでなく、同じようにして、センターで活躍している人が、ご近所に戻って二次会的な教室を開くのだ。自宅で細々とやっている形でいい。

②もともとご近所にあった、似たような営みを掘り起こし、それを若干充実させる。

サロンなら、すでに井戸端会議が各所で開かれている。それを探し出し、不足している部分があれば支援するなど、少しだけ「色をつける」程度でいい。

③新たにそれぞれの営みのご近所版をつくる。

ある地域で、町内圏域でラジオ体操をやっていたが、冬は休止しようとなった。しかし体操は、細々とでもいいから続ける必要がある。そこでリーダー格の人や小リーダーなどが、それぞれのご近所で立ち上げたらどうかと言ったら、すでにリーダーの１人は足元で仲間を集めてやっていた。その隣でも同じことが行われていた。

④老人会や子ども会などは、ご近所単位のクラブをつくる。

今は町内ごとに作られているが、これをさらに細かく分ける。

⑤町内のイベントもご近所単位に実施する。

敬老会や成人式など、町の主だったイベントもご近所単位に実施するようにする。こうすれば、要介護の人も敬老会に参加できる。今は市の全域から高齢者を集めて敬老会を開くので、要介護者などは参加できないし、実際に参加することを、主催者は想定していない。

⑥ボランティアも、ご近所版をつくる。

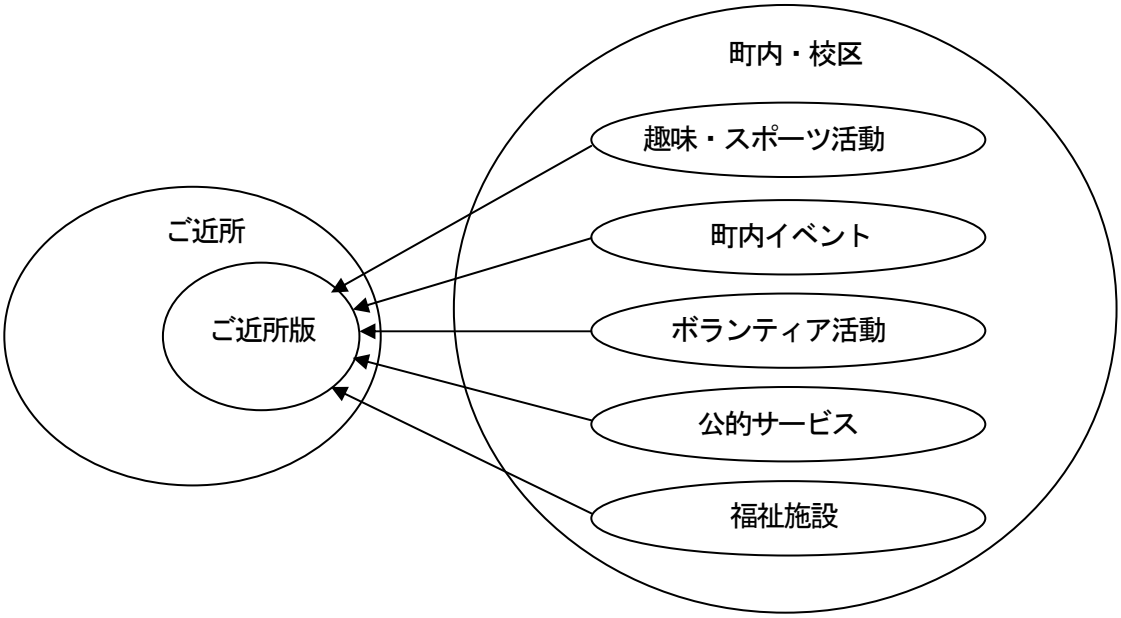
市に一つあったものをご近所ごとに分解する。各自が居住するご近所で立ち上げる。

⑦公的サービスも、ご近所毎にサービス拠点を設ける。

いちいち市の福祉センターに行かなくてもいいようにする。介護予防教室のようなものも、ご近所ごとに開く。講師やスタッフは各ご近所から調達する。

⑧福祉施設もできればご近所毎につくる。

それが無理ならば、施設を分解して、その一つ一つをご近所につくる。対象者の自宅をブランチにしてもいい。スタッフは各ご近所の中から発掘する。



⑸要介護者も豊かさの仲間に加えてこそ

わざわざご近所単位に変えるのは、まずもって要援護者もそれらの組織や活動に参加できるようにするためである。介護保険が始まって以来だと思うが、住民は要援護者を仲間に入れることを敬遠するようになった。要援護になったらサービスのお世話になればいい、私たちのグループに来て迷惑をかけないでほしいと。地域では、元気な人と弱った人が棲み分けをするようになった。

今、国を挙げてめざしているのが「共生社会」作りであるが、現実はそれと反対の方に向かっている。共生社会を今、実践するとしたら、まずは要援護者を仲間に加えることである。たしかに認知症の人が１人加わると、メンバーが困惑するようなことが起き、その人のおかげで何事もスムーズに進まない。「こんな人を入れるからだ」という愚痴が出てくる。それでも我慢して、その人と折り合っていく。それを助け合いというのではないか。

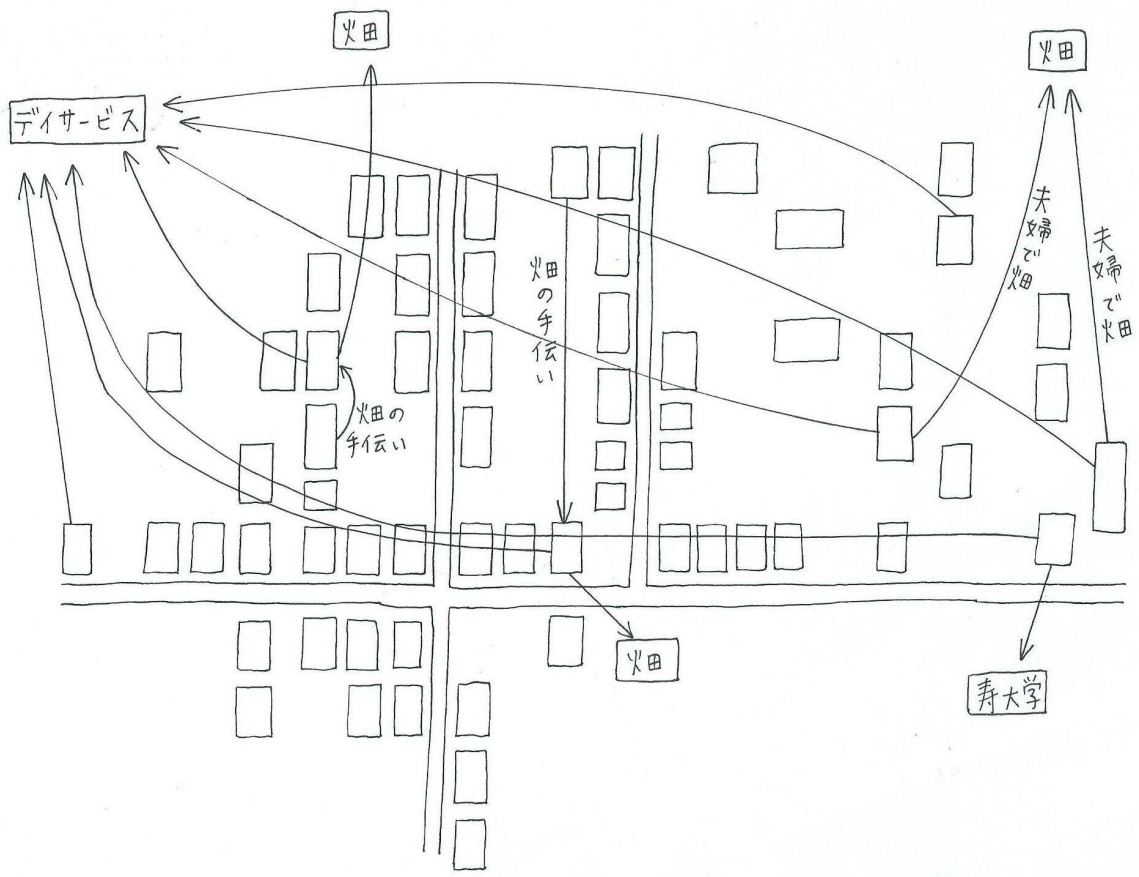
と言っても、要援護者を排除したいという気風が、すぐになくなるとは思われな

い。具体的な方策を考えなければならない。

①デイサービスセンターや施設が利用者のグループ参加を働きかける

要介護者の少なからずが、デイサービスを利用したり、施設に入所している。すると、今までやっていた趣味活動をあきらめて、グループから脱退してしまうが、そうではなく、彼らが地域グループに参加し続けることができるように、デイサービスセンターや施設が、移送や介助を引き受けるなどして、グループを説得していく。

福祉の理想がレベルアップした今、里帰りは地域全体の課題になっていい。しかしそれを家族だけに負わせるのは酷というものだ。ご近所の人たちで迎えてあげる必要がある。



上のマップは、デイサービスを利用している人の、自宅にいるときの活動である。２人が畑を楽しんでいる。それを支援している人が２人いた。こういうやり方をデイサービスセンターが働きかけるといい。それに、夫が妻（デイサービスを利用している）の畑を応援しているケースも２件ある。

②グループも要介護者を退会させずに、活動を続けられるようにする。

要介護でもできる方法を考えてあげる。移送サービス（相乗り）をする。介助人を付けるなど。

③ご近所に、要介護者を仲間入りさせるための特別な人材も必要だ。

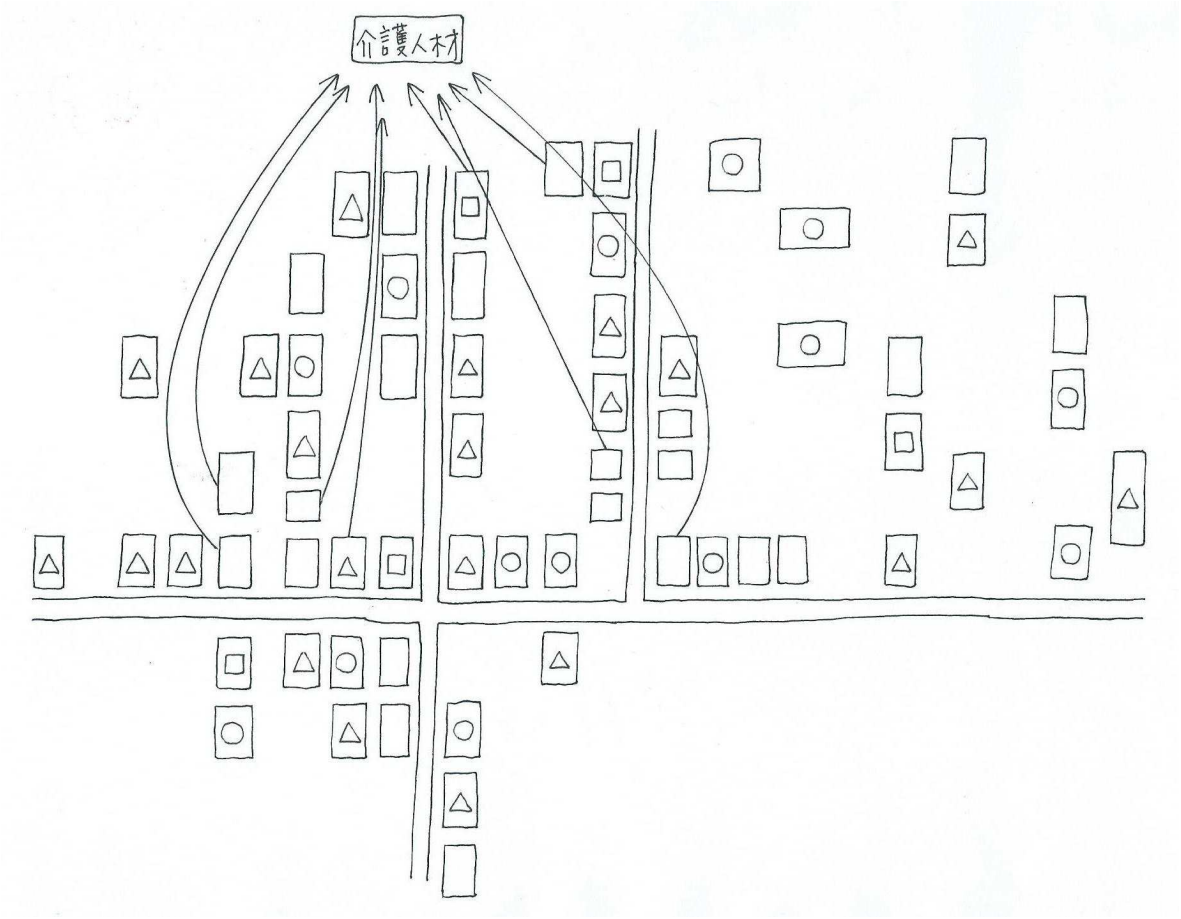
私は「入れさせ屋さん」と呼んでいるが、そういう口利きの上手な人がいる。「私も一緒に入るから、この方を入れてあげてね」という方法や、「介助人付き」で入れてもらうという方法をとっている人もいる。また、リーダー級の人が半ば強引に入れてしまったり、認知症などの本人が堂々と（こちらも半ば強引に）入っていくことでうまくいったケースもある。

④老々は夫婦共に元気なうちに地域グループに２人一緒に参加するよう働きかける

老々世帯が多い町内会もあるが、今のところ２人とも元気だというので、何もしていない。しかしその後、妻が要介護になり、夫が介護することになると、妻とともに閉じこもってしまうため、地域の人が入れなくなる。状況が悪化すれば、介護殺人も起こり得る。そこで、夫婦共に元気なうちに、２人一緒に地域グループに参加するように働きかける必要がある。

⑤要援護者が豊かさづくりの輪に入るには、ご近所にいて、日常的に要援護者を支える人材も必要だ。

ご近所（町内会）ごとに数名の介護人材がいるはずだ。元看護師や保健師、ヘルパー、介護福祉士など。そして、家庭介護経験者も同じぐらいいる。



このマップは、介護のプロ（ＯＢも含む）に印（矢印）をつけたものだ。また、舅などを介護した経験のある人も同じぐらいの数がいる。ちなみに〇が一人暮らし、△が老々世帯、□はその他の要援護者。地方に行くとこのように、要援護者がたくさんいる。

＜第５章＞

解決策さがし

1.これはまだ「解決」ではない

関係者に問題を提示し解決策を考えてもらうと、以下のような案が出てくる。

①状況をよく把握する

－「把握」した上で、どんな解決策を考えるかが大切

②情報を共有する

－共有した上で、どんな解決策を考えるか

③当面、様子を見る

－まだ行動に移しているわけではない

④見守る

－ただ見ているだけでは、解決行動とは言えな**い**

⑤相談に乗る

－相談に乗った上で、どんなアドバイスや支援策を講じるかが大切

⑥サロンに招待する

－サロンという環境に置いてあげただけ。そこからどんな変化が？

⑦関係機関やサービスにつなげる

－繋げれば一件落着とは言えない。当面の応急措置にすぎないかも

この６つは、まだ問題は解決されていない。この後どうするのかが問題解決の本番なのだ。「状況を把握」した後どうするのか、「見守って」その後どうするのか、「相談に乗った」後どうしてあげるのか。サロンに行けば何でも解決するのか。

サービスにつなげれば一件落着なのか。サービスというものを今の関係者も住民も過信している。施設入所にしても、ショートステイにしても、デイサービスにしても、これが果たして恒久措置なのか。本人の立場から真剣に考える必要がある。

2.解決策さがしの基本的なあり方

解決策を考える段階になると、マップから離れて、既成のサービスや活動を適用しようとする。これでは何のためにマップを作るのかが分からなくなる。ここからがじつはマップづくりの正念場なのだ。

①本人はどうしたい、どうしている？　周りの人はどうしている？

問題に対して当事者はどうしたいのか、実際にどのような解決行動をとっているのか。周りの人たちはどうしてあげたいのか、どういう行動をとっているのかなどを、マップ上で丁寧に聞いていく。

②解決につながりそうな人や行動を探す

当事者の問題への解決努力とは別に、その問題解決につながりそうな地域の資源を探してみるのもいい。

③解決策さがしはマップ作りの場で行う

解決のヒントはマップ作りの場に転がっている。そこでヒントを見つけ、それを生かした解決策を住民に提案し、反応を見ながら、現実的な解決策を模索する。

④解決策の引き出しをたくさん用意しておく

問題ごとにいくつかの解決策の案を用意しておいて、それをぶつけていけば、どれかは当たるも可能性が高い。

3.解決策を住民流で練り直す

解決策が住民流に沿ったものであるか、以下のような角度からチェックし、住民流になっていなければ、練り直す必要がある。

❶本人の自助力を強化させているか

自助力とは、本人と家族だけの力で何とかすることではなく、逆に周囲の人を巧みに活用する腕があるかということで、そういう資質を培っていかねばならない。

❷同じ問題を持つ人同士の助け合いを仕掛けているか

一人暮らし女性の家が数軒並んでいると、まず助け合いをしている。それを生かす。

❸対象者をまとめて対応していないか

住民は大抵は一対一の関係で支援している。それが住民の流儀だ。

❹本人を担い手に据えようとしているか

要援護者だって、ある部面では担い手になれるものだ。

❺当事者との相性を大事にしているか。当事者が見込んだ人か

当事者は誰がいいと言っているのか、誰と相性が合うのかを点検する必要がある。

❻当人と担い手の自然な接点を利用しているか

両者が自然に出会う所で活動を仕掛ければ、無理がない。

❼双方の問題が同時に解決するよう仕掛けているか

Ａさんの苦手な部分をＢさんが持っている。一方Ｂさんの苦手な部分をＡさんが持っているという関係が見つかれば、つなげるのにベストな関係といえる。

❽担い手が持っている最強の力を引き出しているか

企業人ならば本業の場で使っている腕を生かす。趣味活動をしている人なら、その趣味の腕を使えるようにするのだ。

❾問題解決力のある人材であるか

自治会長とか民生委員、福祉委員等の人材が地域にいるが、それ以外にも天性の世話焼きの資質を持った人がいて、その人たちが実質的に問題を解決している。

⑩活用する組織、人材は本当に機能しているか

「その人たちが本来担うべきだ」と言っても、その気や能力がなければどうしようもない。肩書に振り回されないこと。

⓫既成のシステム、組織、人材と安易につなげていないか

このやり方は簡単だから誰でも使いたがる。しかし当事者目線で見る限り、そういうやり方がうまくいくとは考えにくい。

⓬ご近所内の問題にご近所内の資源を使っているか

外部資源を簡単に導入しないということである。ご近所の連帯を育むためには、まずは(外部の人でなく)ご近所の人に頼ることが大切なのだ。問題が生じるたび、ご近所外の資源を気楽に使っていては、ご近所内の連帯はまったく育たない。

4.担い手主導・推進者主導は改める

今の福祉では、問題が出てきたら、解決につながりそうな策を既成のシステムなり制度、組織、活動の中から探し出すという方法をとっている。担い手目線、推進者目線での問題解決の方法といえる。担い手や推進する側の都合で解決策を考える。当事者や住民がそれをどのように受け止め、評価するかは考慮されていない。

以下に、よく出てくる「取り組み課題」を１０項目並べてみたが、皆さんはどう思われるか。おそらくほとんどの項目で「妥当な考え方」と結論されるだろうが、じつはこの１０項目のすべてが「担い手目線」の取り組み課題なのだ。こういう取り組み課題を抽出するのなら、そもそもマップ作りの必要はない。

1 毎日コンビニ弁当や外食頼りの男性がいるので、会食会を立ち上げたらどうか。
2 自治会に加入していない人がいるので、自治会長等が訪問して入会を勧める。
3 この地区に福祉委員がいることを知らない人がいるので、周知を徹底する。
4 老々世帯で心配な家もあるので、民生委員に訪問してもらう。
5 ふれあいが欠けているようなので、自治会でサロンを立ち上げたらどうか。
6 若者世帯がいるのに高齢者と交流がない。〇〇会館で交流イベントを開こう。
7 一人暮らし高齢者が多いので、班長や福祉協力員などで見守り隊を編成する。
8 一人暮らし等で老人クラブに加入していない人もいるので、加入促進を図る。
9 認知症で一人暮らしの女性が気になる。民生委員がデイサービスを勧める。
１０ 区長を中心に班長、福祉委員、民生委員などで小地域福祉の推進体制を作る。

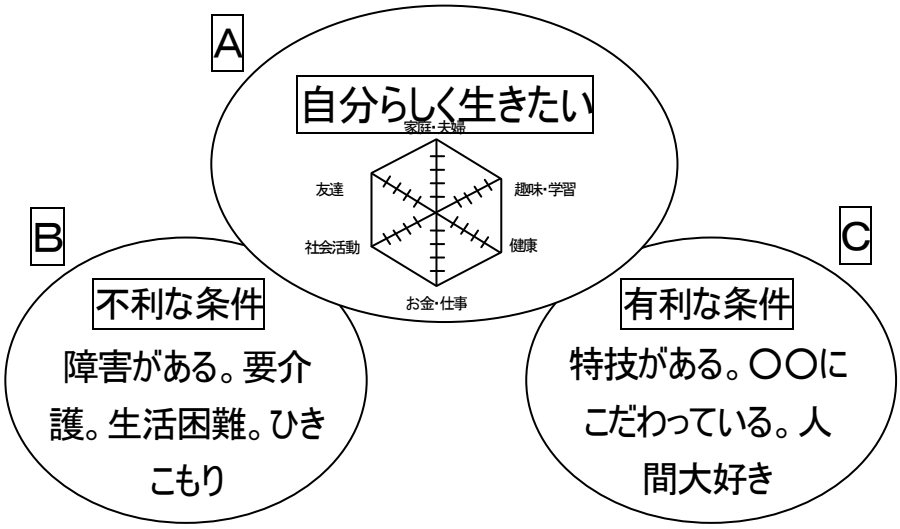
5.「その人らしく」応援型問題解決法

⑴福祉の目的は「その人らしく」を応援することだった

福祉の目的は「どんなに要援護になっても、住み慣れた家や地域で、安全かつその人らしく生きて行けるように地域全体で支えること」だと国も言っている。

⑵「その人らしくの実現」をめざす解決法の基本図

ここに「その人らしく」を主目標にした問題解決法の基本図を示そう。今までは B を解決するのが福祉だと考えてきた。本解決法は、取り組みの主たる対象を B から A に移すということである。本人の願いに即した問題解決法でもある。



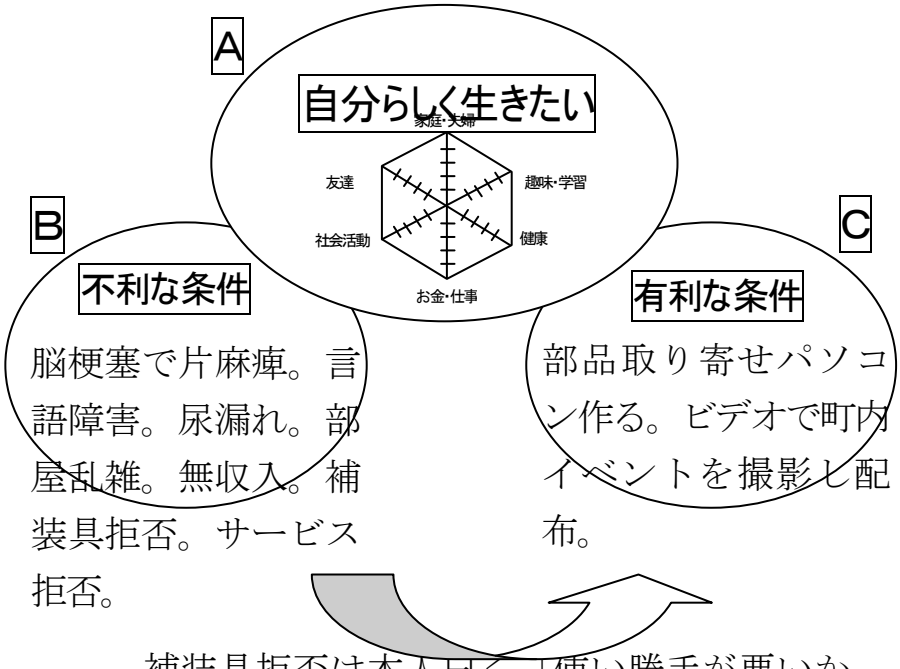
まずA。これが、当事者本人がめざしている「その人らしい生活」の実現という目標。本研究所ではそのための「豊かさのダイヤグラム」を提示している。この６つの要件が充足され、豊かさ満開になれば、目的実現だ。

次いでB。その目的を果たすための「不利な条件」。福祉関係者が主に関心を持ち、対応している対象で、要介護、障害がある、生活が困難といったこと。

最後にCは、目的実現のための本人の有利な条件。特技がある、こだわっているものがある、人が好き、協力者がいる等。

⑶「その人らしく」支援型福祉による問題解決行動の実際

一人暮らしの高齢男性。様々なハンディを抱えている。この場合のポイントはハンディに替わるたくさんの能力を持っていること。これを生かせばいい。



補装具拒否は本人曰く「使い勝手が悪いから」。サービス拒否は「自立意欲を失うのがこわいから」。自立志向の表れで、むしろ「有利な条件」だった。それにパソコンを組み立てる技術があるし、創意工夫が得意。ボランティア精神もある。これらを生かせないか。

⇩

①パソコン組み立て講座を開く(その支援)。
　自宅で開けば「部屋はきれいにしよう」。
②ビデオ講座も開ける。両講座で収入も。
③創意工夫の腕を生かし、片麻痺でも着脱できる
　補装具を関係者と開発。生活の不便も解消。
④町内会などがビデオ作製を有償で依頼。
　パソコンの修理・請負も含めて事業に。